模範裁縫教科書

株式會社
三省堂

教科書文庫
4
920
42-1927
2000081280

41253
教科書文庫
4
920
42-1927
20000
81280

資料室

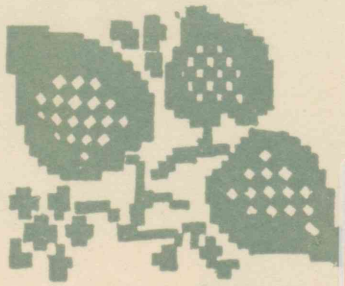
昭和二年十月七日
文部省檢定濟
高等女學校裁縫科教科書

教科書文庫
4
920
42-1927
2000081280

裁縫科教科書模範

大妻コタカ著

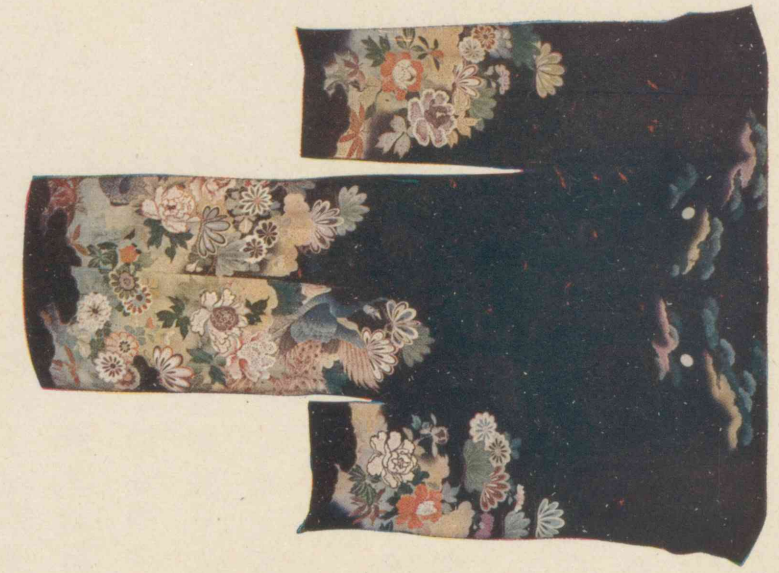
四卷



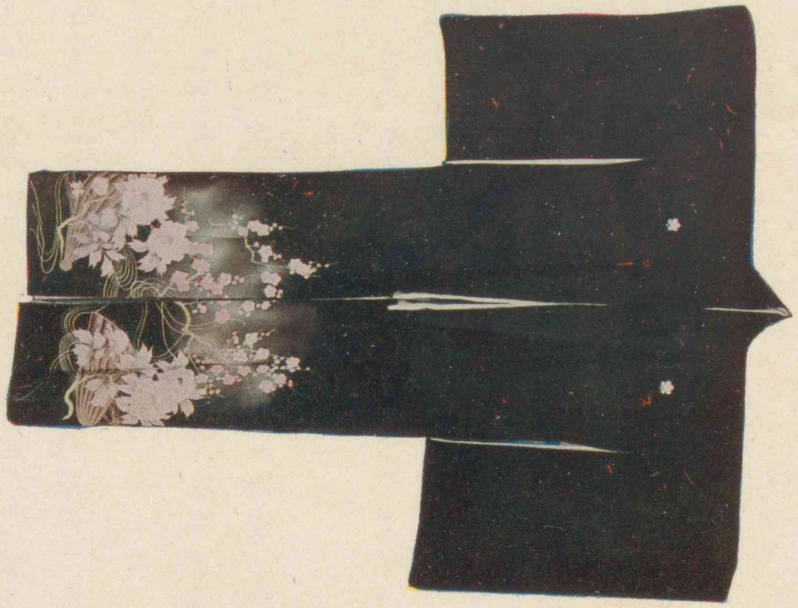
広島大学図書
2000081280

社會式株
三省堂

46
930
昭2



振袖島原模様



止袖江戸褄模様

広島大学
教
81280
図書

はしがき

一、本書は、高等女學校教授要目に準據し、高等女學校及びこれと同程度の各種學校の裁縫科の教科用書に充てたいために編纂したものであります。

二、本書は、實際教授上の便宜から、文部省教授要目の順序を變更し、且つ要目に掲げられてゐないものでも實際必要なものは之を附加しました。

三、本書は、四箇年又は五箇年の高等女學校のいづれにも適切な教科書とするために全體を五卷に分け、第一卷から第四卷までは和服、第五卷を洋服として、各學年の配當は次のやうに致しました。

四箇年程度の學校では、第一學年には第一卷、第二學年には第二卷、第三學年には第三卷、第四學年には第四卷と第五卷とを併用させます。

又五箇年程度の學校では第一卷から第三卷までは、前者と同樣に扱ひ、第四卷と第五卷とは第四・五學年を通じて併用させます。

四、本書は、多年の經驗と研究とを基として、種々の方法の中から最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れないやうにいたしました。

五、從來、使用の鯨尺・曲尺がメートル法になりましたので、これまでの寸法については適宜にこれを取捨し、學習者の實習と記憶とに便利なやうにいたしました。

大正十五年十二月

著者しるす

模範裁縫教科書　卷四

目次

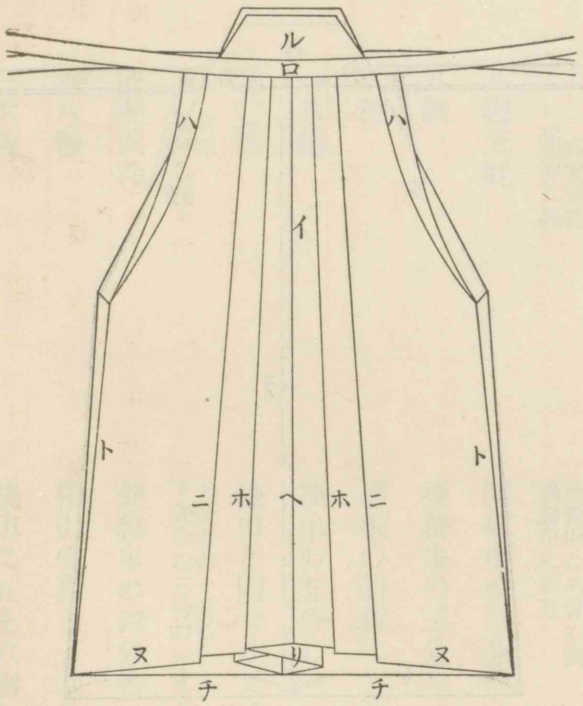
第一章　男袴……一
第二章　男物單羽織……二三
第三章　薄物單衣……三三
第四章　丸帶……三八
第五章　男帶……四三
第六章　小袖模樣及び紋について……四七
第七章　小袖袷重ね……五一
第八章　比翼……五九
第九章　單衣重ね……七二
第十章　袷半コート……八二
第十一章　夜具類……九〇
第十二章　大巾中巾物各種裁ち方……一〇四

模範裁縫教科書　卷四

第一章　男　袴

男袴各部の名稱

前



イ　紐下
ロ　前紐
ハ　笹襞
ニ　一の襞
ホ　二の襞
ヘ　三の襞
ト　相引
チ　蹴廻し
リ　切り上げ
ヌ　前脇巾
ル　裏腰

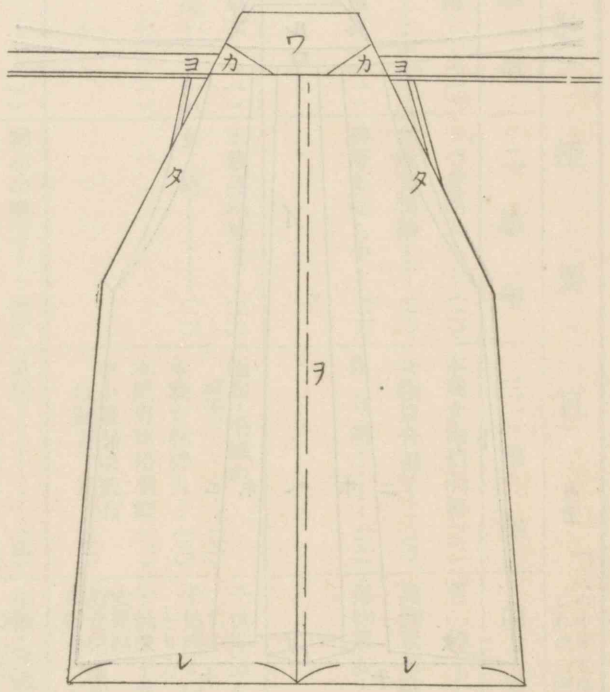
教授要目

注意　（　）の中の字は卷數を示したものであります
これは一週四時間の要目であります

學年 ／ 學期	第一學期	第二學期	第三學期
一學年	基礎的技術……（一） 襦袢……（一） 本裁女物單衣…（一）	本裁男物單衣…（一） 四つ身單衣……（一） 四つ身袷……（一）	子供帶……（一） 下穿……（一）
二學年	一つ身綿入……（二） 本裁女物袷……（二） 寢冷え知らず…（二）	本裁男物袷……（二） 女袴……（二）	綿布の繕方……（二） 女物袷長襦袢…（二） 一つ身袖無羽織（二）
三學年	本裁女物袷羽織（三） 女物單合羽……（三） 腹合帶……（三）	絹布・毛織の繕方……（三） 本裁女物綿入…（三） 本裁男物袷羽織（三） 中小裁羽織被布の裁方…（說明）（三）	足袋……（三） ミシン使用法…（三） 婦人シャツ……（三） 涎掛と子供前掛（三） 割烹前掛……（三）
四學年	男袴……（四） 男物單羽織……（四） 薄物單衣……（四）	子供洋服について……（五） 子供服寸法とり方……（五） 子供服下着類……（五） 女兒服……（五） 男女兒帽子……（五） 丸帶……（四）	小袖・模樣・紋について……（四） 小袖袷重ね……（四） 男兒服……（五）
五學年	本比翼二分ノ一（四） 附比翼二分ノ一（四） 單衣重ね二分ノ一（四） 男兒シャツ ヅボン下……（五）	袷半コート……（四 男帶……（四） 小學生服……（五） 女學生服……（五）	男學生服……（五） ケープ……（五） 女兒外套……（五） 夜具類（說明）……（四） 大巾物裁方（說明）（四）

男袴各部の名稱

後



ヲ　後　襞
ワ　腰　板
カ　附　菱
ヨ　後　紐
タ　投　げ
レ　後　巾

㊀ 普通仕立上げ寸法と寸法の割り出し方

紐下　八七糎　着丈の十分の六に四糎加へる

相引　六〇糎　紐下の三分の二に二糎加へる

後巾	三〇糎	着物の後巾に同じ
後腰巾	二四糎五粍	後巾の四分の三に二糎加へる
後重ね襞	上 三糎　下 一糎五粍	後巾の十分の一　後巾の二十分の一
腰板巾	上 一六糎三粍　下 二四糎五粍	後腰巾の六分の四　後腰巾に同じ
腰板の高さ	八糎五粍	腰板巾の三分の一に四粍加へる
附菱の巾	九糎	後腰巾の三分の一に八糎位加へる
附菱の高さ	五糎	腰板の斜線の二分の一に八粍加へる
前脇巾	一八糎	後巾の五分の三
前紐附巾	三〇糎	後巾と同寸か又は二糎廣く
前寄襞巾	上 三糎　下 五糎八粍	上後巾の十分の一　下後巾の五分の一より四粍狹く
笹襞巾	四糎五粍	前脇巾の四分の一
襠の高さ	四八糎	相引の高さより凡そ六糎を減ず
乘間	三六糎	後巾に凡そ六糎加へる

切り上げ　六糎

後　紐　丈六五—八五糎　巾三糎

前　紐　丈　三米——三米七〇糎　巾三糎

㊁　裁ち方と積り方

布の數と裁ち切り寸法

二　枚　後布丈　一米(裾に巾の三二糎の處から切り上げを一糎つける)

二　枚　後襠丈　九九糎(切り上げを五糎つける襠の高さは五一糎)

二　枚　前脇布　丈一米(切り上げ三糎)

二　枚　前奥布　丈九七糎(切り上げ三糎)

一　枚　腰布丈　二三糎(但し二つに切つて使ふ)

二　枚　小襠丈　六一糎(襠の高さ五一糎)

二　枚　後紐丈　八五糎

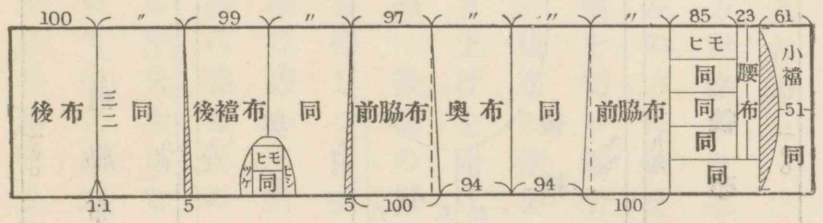
前紐丈　三米——三米七〇糎(全部の長さ)

二　枚　附菱丈　八糎　巾一二糎

後巾の五分の一

本裁男袴の裁ち方

用布　並巾　9米　55糎

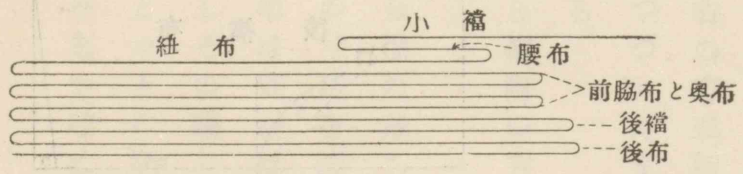


積り方

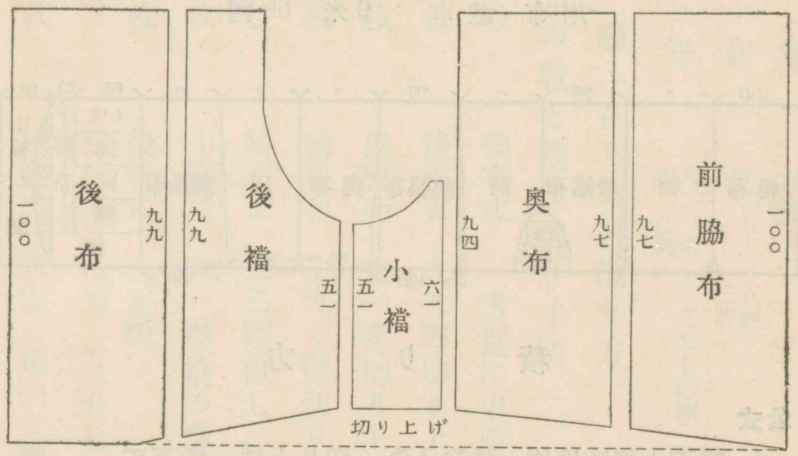
公式

1. **紐下＋裾繕け代＋縫ひ込み＋切り上げ＝後布丈**
2. **{總用布－(後紐丈＋腰布＋小襠)＋裁違}÷8＝後布丈**
   { 955 －(85 ＋ 23 ＋ 61)＋ 14}÷8＝ 100
3. **後布丈×8－裁違＋後紐丈＋腰布＋小襠＝總用布**
   100 ×8－ 14 ＋ 85 ＋ 23 ＋ 61 ＝ 955

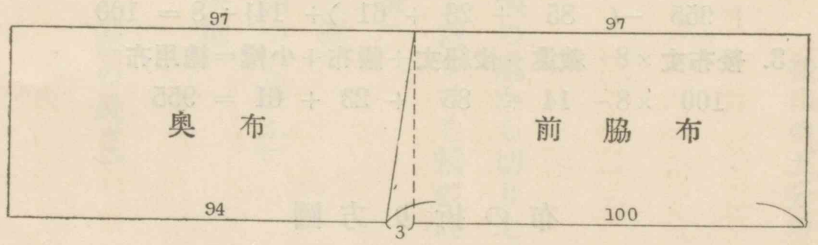
布の折り方圖

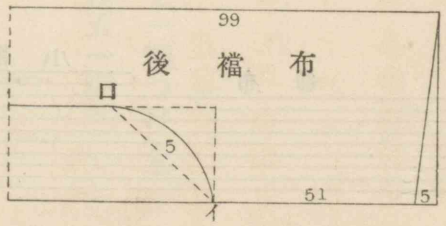


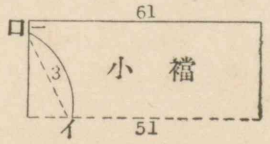
切り離した圖



裁ち方分解圖







鋏の入れ方

積り方が終つたならば、折り方圖のやうに折り疊み右の方が裾である。から、左の方に鋏を入れて、後布・後襠布・前脇布と奥布(つづいたまま)紐・腰布・小襠を切り離す、但し二枚づつ布はつながつてゐる。

一、後布　後布の裾を眞直ぐに裁ち、巾三十二糎の處から襠附の方へ一糎の切り上げを附ける。

二、後襠布　後襠の裾に五糎の切り上げを附け、そこから襠の裁ち切りの高さを標しつけ、次に乘間より小襠巾を減じた殘りの寸法を、後襠布の小襠附の方から計つて刳りの巾とする、この刳りの巾は普通は布巾の中央邊に當る、その刳り方は襠の高さを標してイとし、その殘りを二等分して中央をロとし、(但し刳りの巾標の上に)このイとロとの間に斜線を引いて、中央に五糎ほど(斜線の凡そ六分の一)の丸みをつけて刳る、その殘りからは紐と附菱とを裁つ。

三、**前脇布と奥布**　丈を二つに折つて、折り目から奥布の方へ三糎切り上げをつけると、前脇丈は一米で切り上げは三糎つき、奥布丈は九十七糎で切り上げは三糎つく。

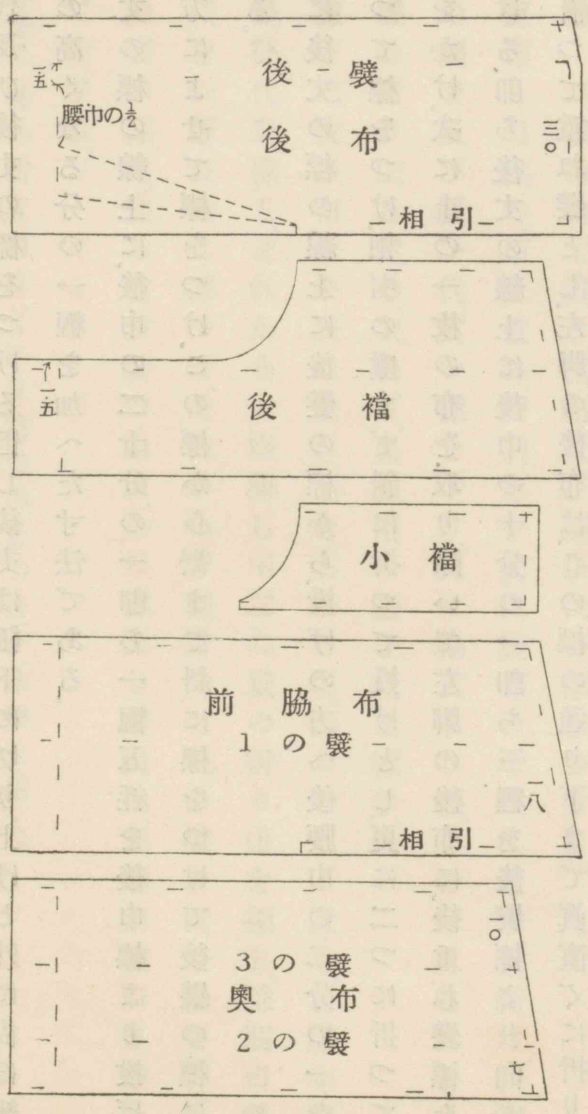
四、**小襠**　中表にして巾を二つに折り、裾を右に輪の方を手前に置き、まづ裁ち切り襠の高さを輪の方に標してイとし、上部に奥布附の縫ひ代一糎を標してロとし、イとロとの間に斜線をひいて、その中央で約三糎の二(斜線の十分の一)の丸みをつけて裁ち落し、輪の方も裁つ。

五、**紐布と腰布**　つづいてゐるまま巾を五等分して前紐一本を裁ち切り、次に腰布を取り、その殘り布の巾を四等分して二本を後紐、他の二本を前紐とす。

㊂　標附け方

一、**後布**　二枚の布を中表に重ね、裾を右に、相引を手前にして置き、裾絎け代を出來上り一糎になるやうに標し、次いで相引の高さを標して、相引

圖方け附標



の縫ひ代を一糎につけ、次に寸法通り上下に後巾の標をつけ、後襠附縫ひ代、及び後丈の標をつける、但し後丈は紐下に切り上げと外に尚ほ紐附の高くなる分の一糎を加へた寸法である。

後丈の標の線上に、後巾の二十分の一即ち一糎五粍を後巾標より投げの方によせて標をつけ、この標から裾まで斜に標をつけて後襞の標にする。

次に後丈の標の線上に後襞の標から、投げの方へ後腰巾の二分の一を計つて標をつけ、相引の處まで斜に折つて投げとし、更に二つに折つて躾をかけ、次に上の一枚の布を、取り除いて左脚の後布に、後重ね襞標をつける、即ち後丈の線上に後巾の十分の一即ち三糎を後襞標より向ふへ計つて重ね襞とし、左脚の後布は、この標の通り下まで眞直ぐに折り、右脚の後布は後襞標の通りに折る。

二、後襠布　二枚の布を中表に重ね、裾を右にして圖のやうに置き、後布の腰立て標にならつて腰立て、標裾絎及び小襠附の標をつけ、乘間の縫ひ代を一糎五粍につけ、上の巾を裾につけて、その縞目を通して標をつける。

三、小襠　二枚重ねて置き、裾絎及び縫ひ代の標をつける。

四、前脇布　二枚の布を重ね、相引を手前に後布のやうに置き、裾絎け代、相引の高さ及び縫ひ代、丈の標をつけ、次に脇襞巾の標をつけて、これを一の襞の折り山と定め、次いで、奥布附の縫ひ代を標す。

五、奥布　二枚の布を中表に重ね、裾を右にして、圖のやうに置き、前脇布附の縫ひ代を標し、それから七糎離して二の襞の折り山を標し、乘間の縫ひ代を一糎五粍に標つけ、それから十糎計つて三の襞の折り山を標す。三の襞の深さ、即ち重ね襞の山は、この標よりも尚ほ、五糎乘間の方へよせてつける。

注意　襞の折り目などには筆で標をつけず、糸標を用ふ。

㊃　縫ひ方順序

一、縫ひ合せ方、二、襞取り方、三、笹襞取り方、四、腰板の作り方(部分縫)
五、前紐附けと腰立て、六、仕上げ。

一、縫ひ合せ方

1 左右の投げを三糎位の針目で表には極く細かく針目を出して絎ける。投げは斜でのびやすいから、のばさないやうに注意する。

2 後襠と後布とを縫ひ合せ、兩脚とも襠の方へ折りをつける。

3 前脇布と奥布とを縫ひ合せ、奥布の方へ折りをつける。

4 奥布と小襠とを縫ひ合せ、小襠の方に折りをつけ二糎程の針目で隱し躾をかける。

5 後襠と小襠とを縫ひ合せ、小襠の方に折りをつけ二糎の針目で隱し躾をかける。

6 乘間を袋縫ひにする。

7 相引を縫ひ、前布の方に折りをつける。

8、兩脚布とも、裾絎けの躾をかけて一糎五粍の針目に絎ける、この際、後布の後巾標の處に、襞を一つ取つて切り上げの形を作る。

注意　布の縫ひ合せには裾を揃へて縫ふ、從つて正しく裁つたものならば上も揃ふ。

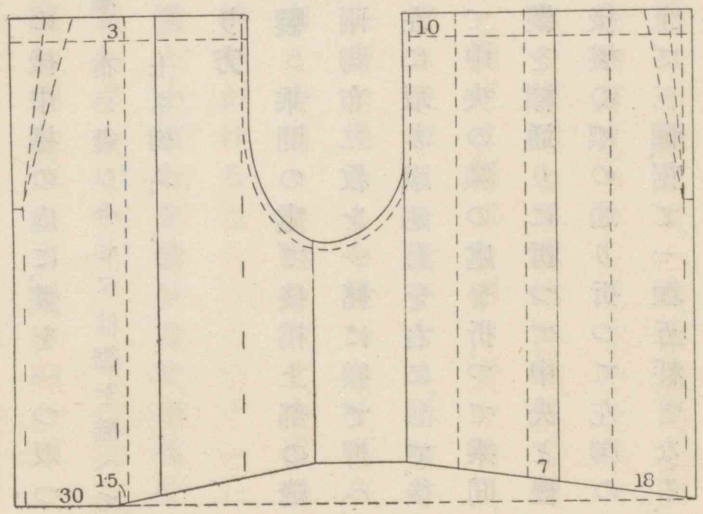
二、襞取り方

1 後襞　乘間の處で後襠上部の縫ひ目を眞直ぐに裾まで縞目を通して、兩脚布二枚を一緒に躾で押へ、これを後の中心にする、後布の腰附を左に取り、蹴廻しを右にして、後布を出して置き、襠を右脚に折り返して中央の躾の處を折つて乘間の折りを右脚に返す、次に左脚の重ね襞を標通りに折つて中央と後布の腰巾二分の一の標と合せ、右脚は後襞の標の通り折つて左脚の後襞標の上に重ねる、卽ち後重ね襞は上で三糎、裾で一糎五粍となる、その上にあらく躾をかける。

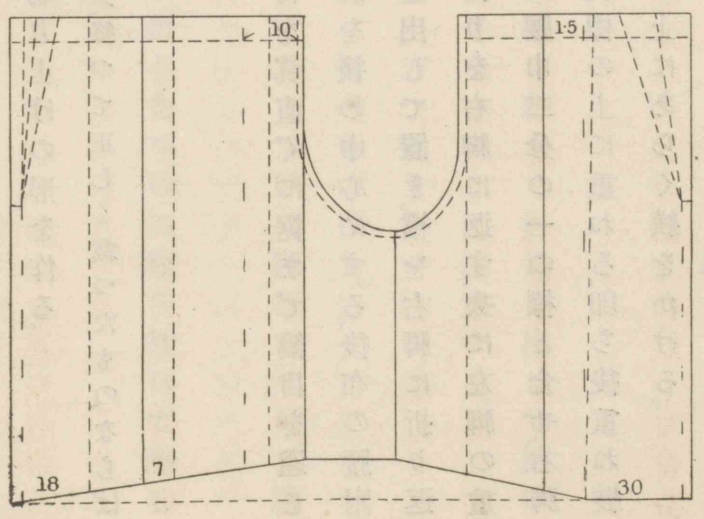
2 前襞　襞を取つた後布を下にし、前布を上に出して襞の山に折りを

圖方り取の襞び及方せ合ひ縫

左　脚　布



右　脚　布



つける、但し右脚は三の襞を折らずに置く。

乘間の前の縫ひ目を、乘間の後の縫ひ目に重ねて中心を定め、右脚三の襞標を中心に重ねる、この時懐ろの襞の折り山は定まる。左脚三の襞標をこれに合せる、これより順に二の襞、一の襞を上下の寄せ襞巾の寸法通りに寄せて、躾をかける。

3　襞に上下共八糎程離れた處にそこの寄襞巾と同寸法に飾り千鳥をする、同樣にその中央にもする。

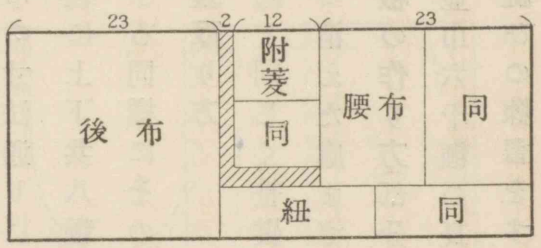
三、笹襞取り方

女袴と同じく、笹襞を作り、笹襞の折れた中を開き、上より相引の處の笹襞の消えた處まで縫ひ、その糸で裏を絎け、相引留に閂留をする。

四、腰板の作り方(部分縫)

1　並巾六十糎の長さの木綿縞を圖に示した寸法の通りに、裁つて、部分縫ひの練習をする。

方ち裁の布用縫分部



2 腰板紙の裁ち方　腰板紙は美濃紙二十枚程の厚みの板目紙を用ひ、前に掲げた、普通仕立上げ寸法の通りに裁つ、まづ腰板の巾と高さを以つて長方形を畫き、次に腰巾の六分の一を兩端から計り、その六分の一の處から下の腰板巾の處へ向つて、それぞれ斜線を引き、その通りに裁ち落す、流れを計つて、くるひがないかを試す方よし。

注意　袴地が絹布ならば上の左右の角を五粍程の丸みをつけて裁つ。

又別に半紙を三糎の巾に裁ち、固く撚り又一糎巾の紙をもつて、そのこよりの上によりたし、腰巾の凡そ二分の一の長さに作つておく。

3 附菱布の裁ち方　腰巾の二分の一を附菱の巾とし、腰板の高さに一糎加へたものを丈として裁ち切る。

4 裏打ちの仕方　半紙をもんで、烙鏝で伸して置き、裏腰布と附菱布の周圍に淺く、淡い糊をつけて、前の紙で裏打ちをする。

5 表腰の貼り方　表腰布及び腰板紙の中央の裏にそれぞれ標をつけ、腰板紙の表側の下部に一糎の巾に糊をつけ、糊を一旦輕く拭き取り表腰布の下を、裏の方へ一糎五粍折り返しの出來るやうにして中央をよく合せ、兩脇に布を平等に出して貼りつける。この際こよりに糊をつけ、下部の腰板からはづれない程度の處に貼りつけ、指先で表からこよりの廻りを押へて落ち着かせ、次に裏に折り返す分に糊をつけて腰板裏側へ貼りつける。兩脇の布を下方から計つて、紐巾より二粍狹く腰板の際まで切り込む。次に腰板の上部及び兩脇を裏の方へ折り返して貼りつける。

6 附菱の位置　腰板の斜のまま計つて、その二分の一に四粍加へたものを附菱の高さとし、腰巾の三分の一に八粍位加へたものを附菱の

巾として表腰に針を立てゝ標とす。附菱布の縦の方に一糎の折りをつけ、折り目を腰板脇の表に當て、先に標をつけた通り附菱の形を作り、形の崩れぬやうに裏側から烙鏝をかけておく。

次に表腰の附菱標に合せ、腰板脇と附菱とをけぬき合せにして、附菱の下方を裏に折り返して貼りつける。

7 **紐紵**　後紐二本共その片方の端を十二糎程殘して全部紵ける。

8 **後紐附とその留め方**　紐の輪の方の端より二糎の處を、腰板脇の下から紐巾の高さの處に合せ、二本の撚り合せ糸を用ひて紐の裏側から針を出し、腰板の脇と紐とを一緒に抄つて糸を結び、その糸を切らずに、そのまま紐の下部腰板の角に針を出し、表返して紐巾を三角に折り、キの字に糸を掛けて留めて置く。

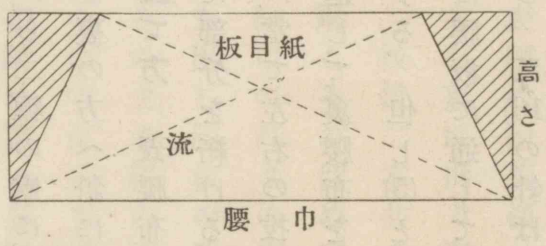
9 **裏腰布附け方**　裏腰布を一糎の縫ひ代にして、後布の腰立ての處へ當てゝ裏からあらく縫ひつけて置く。但し部分縫であるから袴の後布の中心に二糎の襞を取つて右の方に折り返して躾をかけ、上の端から二糎の處に、中央から左右へ腰板巾の二分の一を計り、その殘りを裏の方へ斜に折つて三つ折り紵けをして投げとみなす。

10 **腰立て方**　表腰布の下の角の縫ひ込みを紐の中に入れ、紐の紵け殘した部分を紵ける。表腰板の表を出して後布の腰立ての處へ眞直ぐに當て、左右の投げを少し張り目にして附菱を起して待針を打ち、裏返して裏腰布を見て、圖のやうに數字の順序に糸をかけて腰立てをする。但し(5)と(12)の針は腰板と附菱の上の角とに通し、(14)と(15)の針は腰板に通して表裏の腰布と、紐の上とを少し抄つて共に糸をかける。又(16)の針は一度表に拔き出して直ぐ元の穴から斜に裏に通し、腰板にだけ針目の出るやうにして、裏で(14)から(15)に渡つた糸にかけて打ち留をする。

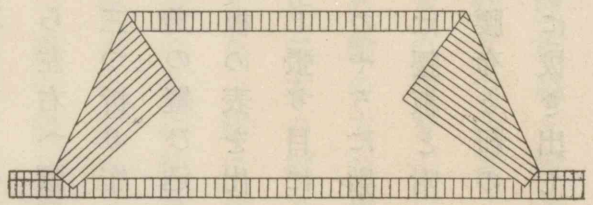
糸は二本撚り合せて用ひ、表腰には小さく針目を出す。腰立てが終

つたならば、裏腰布の上と脇を、表より二粍位控へて折り、内側の周圍に糊をつけて表腰に貼り合せる。

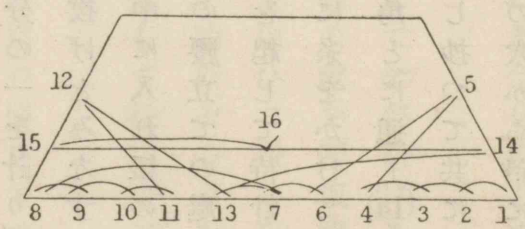
腰板の裁ち方圖



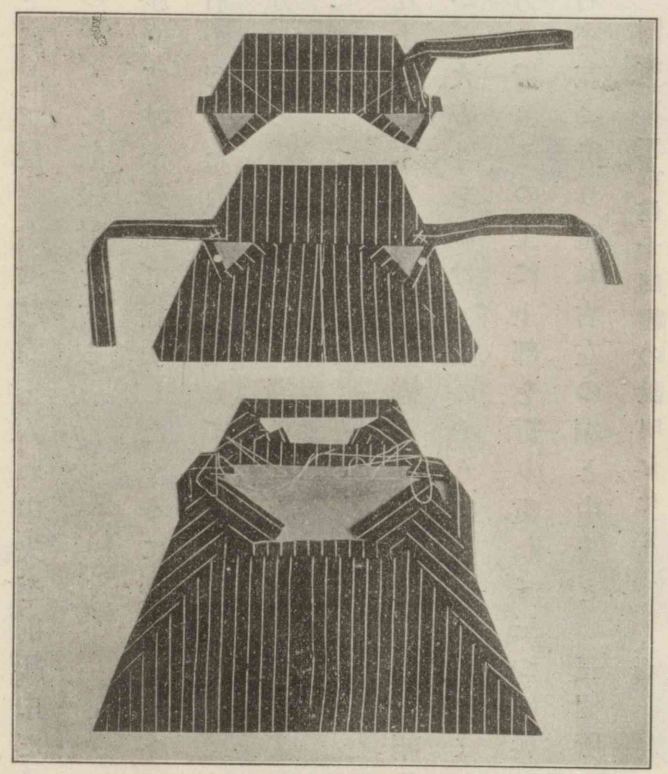
表腰貼り方の圖



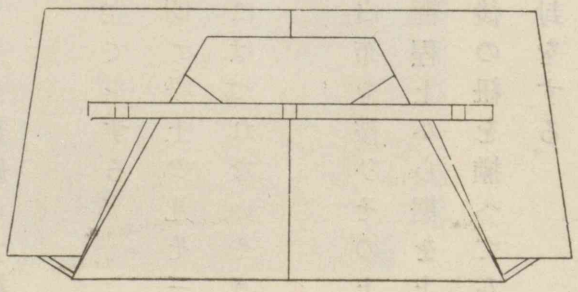
腰立て糸掛順序の圖



部分縫の圖



男袴出來上りの圖



五、前紐附と腰立て　前腰巾の間に接ぎ目の出ぬやうに注意して掛け接ぎにして接ぎ合せ、芯布を入れ、中央を前腰巾だけ殘して全部絎け、女袴のやうに前紐附をする。

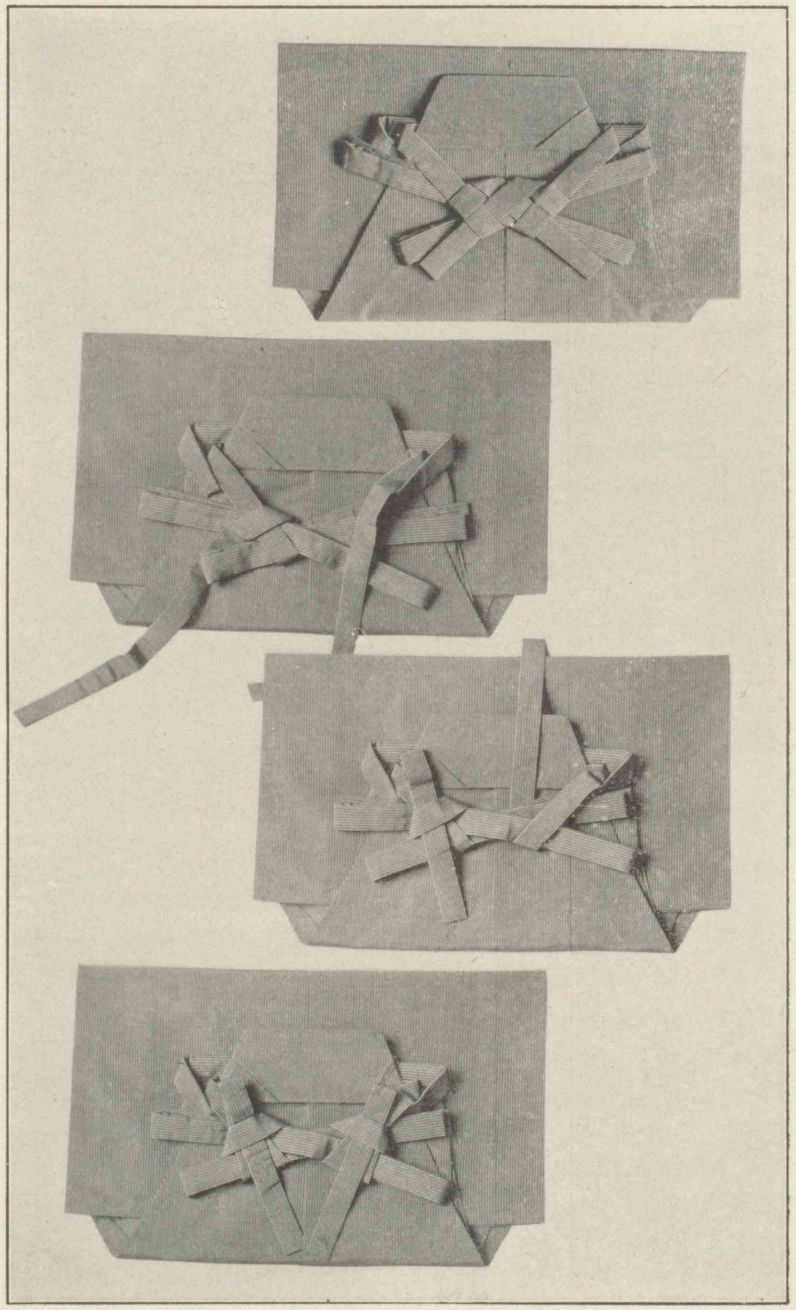
腰立ては部分縫で説明したやうに腰板を拵へて腰立てをする。

右が終つたならば引返して、絹布ならば眞綿又は布切で股上の凡そ三分の一の處から乘間の縫ひ代を包み、縫ひ目より外にはづれないやうにかがりつける。

六、仕上げ　木綿物は薄く霧を吹いて、皺を伸し、絹物は白布を被ひ、その上から火熨斗をかけて、圖のやうに相引の中央より四糎程上から裾を上方に折り、その上に上部を折り重ねて三つに疊み、前後の紐を揃へて左右交互に折り重ね、右左の端と中央との三個所に紙封をする。

備考　一、裁違（たちちがひ）十四糎の説明をせよ。

二、男袴腰立て糸掛順序を問ふ。



袴の紐の疊み方種々

第二章　男物單羽織

單羽織は春の終り頃から秋にかけて、着用するもので、從つてその地質は男物に絽・紗・透綾・麻・セル等が用ひられる。(女物には絽・絽縮緬・紗・壁御召等が用ひられる)

セル等の地厚物には、甲斐絹・羽二重等を肩の滑りをよくする爲に肩當に用ひ、地薄物には肩當は使はない。しかし肩廻りのいたむのを避ける爲に、斜布を少し肩廻りだけにつける。

㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同寸	身丈	着丈の四分の三に四糎加へる、一米五糎内外
袖口	着物と同寸	後巾	着物と同寸
袖附	總附にする	前巾	いつぱい
袖巾	着物と同寸		

衿巾　七糎五粍　　襠巾　七糎五粍
衿肩明　着物より五粍增し　　前下り　三糎五粍
乳下り　背から四五糎內外　　裄　着物と同寸
繰越し　五粍　　裾の折り返し　一〇糎內外

㊁ 裁ち方と積り方

用布の丈の短かいものは襠を鈎裁ちにし、充分あるものは、棒襠に裁つ。

單羽織は袷羽織と違つて、裾の折り返しを三つ折り裄にするから、身丈の出來上りに三つ衿の縫ひ代と、裾の折り返しの二倍とを加へたものを後身丈の裁ち切りにする

前丈は、後丈に尙繰越しの二倍と、前下りとを加へたものである。

襠の補ひ布は、裁ち切り袖口布丈から袖附寸法を減じ、更に繰越しを減じ襠上裄け代(一糎)を加へて二倍したものである。

而して、補ひ寸法を出してから、積り方公式のやうに積つて後丈を求め、次いで前丈もそれに繰越しの二倍を加へた寸法に裁つのであるから、實際に襠の補ひ丈として裁ち落す寸法は、左右の前身頃の繰越し分卽ち、繰越しの四倍だけ先に求めた補ひ寸法より短かく裁ち切るのである。

但し前裾を斜に裁ち切るのは標附け方の時にする。

㊂ 標附け方

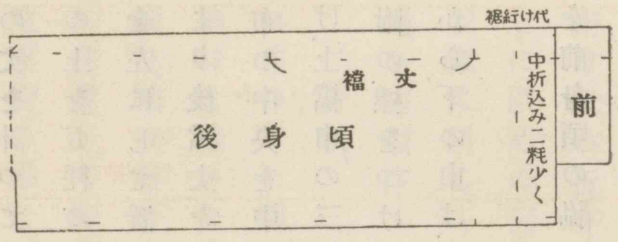
一、袖　中表に兩袖を別々に丈を二つ折りにして例の通り置き、袖丈・袖口・袖巾・山・丸みの標をつけ、次いで袖口布の標をつける。

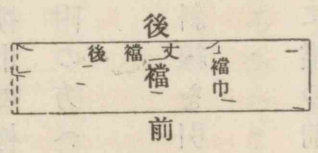
袖口布の丈を二つ折りにして、二枚重ね、裁ち目を袖口にして、縫ひ代は一糎とし、袖口の標は表よりも二粍つめ、丈・巾をいつぱいに標つける。

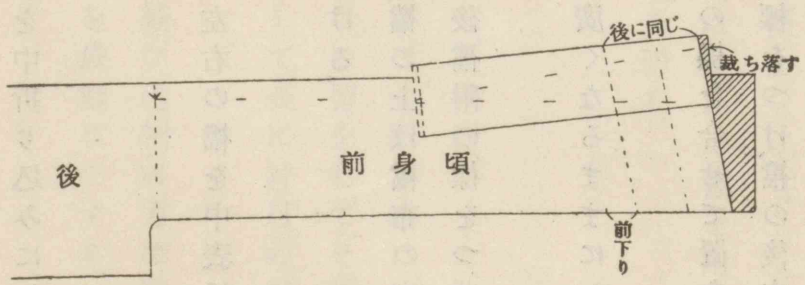
二、身頃　左右の身頃を中表に二枚合せ、衿肩明と前落しの裁ち目は、特に動かぬやうに、よく揃へて針を打ち、肩に假躾をかけ、正しく重ね、前身頃を下に、後身頃を上に背を左手前にして繰越しをつけて置く。

身丈・背縫ひ代・袖附・肩巾・後巾の標をつけ、次に裾の折り返しを計つて、そ

標附け方圖

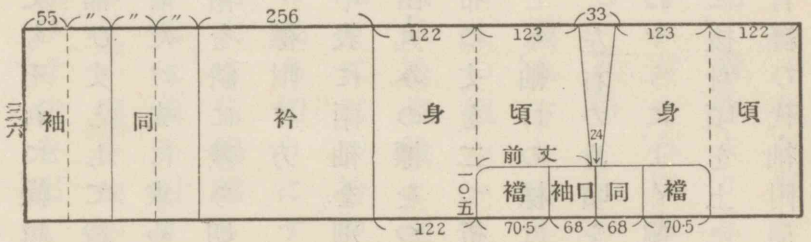






單衣羽織の裁ち方

用布並巾　9米97糎



積り方

公式

出來上り身丈＋三つ衿縫ひ代＋折り返し＝後丈

後丈＋繰越し×2＋前下り＝前丈

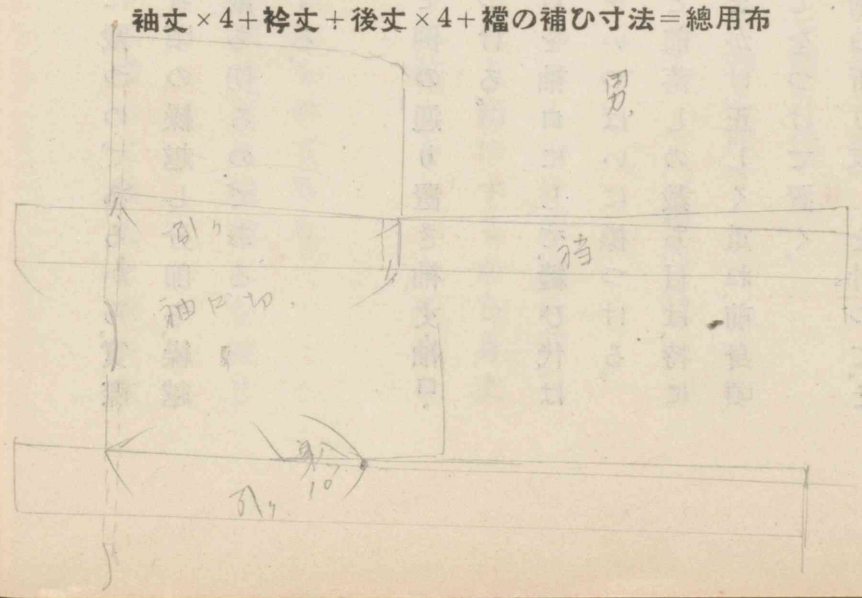
後丈＋繰越し＝脇丈

脇丈－袖附＋襠上紆け代＝襠丈

（裁ち切り袖口布丈－袖附寸法＋繰越し＋襠上紆け代）×2
＝襠の補ひ寸法

{總丈－（袖丈×4＋衿丈＋補ひ丈）}÷4＝後丈

袖丈×4＋衿丈＋後丈×4＋襠の補ひ寸法＝總用布



の寸法の二分の一より少し(二粍位)短かいものを中折り込みにして標をつける。

後襠附の丈を計つて置き、襠の標附にかかる。

三、**襠**　襠の上を五粍の巾の三つ折り紵けにして、左右の襠を中表に重ね、襠の上を左にして置く。

襠の上より後襠丈を計つて、向ふ側に丈標をつける。

次に襠布の中央を中心にして襠巾の標をつけ、襠の上は襠布の中心に標をつけ、上襠巾の三粍を後襠附の方へ寄せて後襠附の標をつけ、次いで前襠附の標をつける。

尙丈標から下の巾は、上の巾の斜線を引延して廣くなるままにしておく。

この襠を前身頃の脇の標の上に襠の前身頃附の標を合せて置き、前身頃に前丈を(後丈標に前下りを加へた丈)計つて標をつけ、襠の後丈の標と前下りの標とに、尺度を當てて、前下りの斜の標をつける。

次に裾紵け代の折り返しの標を、後身頃と同じに定めて標を附け、前布と、襠布とに斜めの無駄切が出るからこれを裁ち切る。

四、**衿**　袷羽織に同じ。

㉔ 縫ひ方順序

一、袖、　二、身頃、　三、前襠附、　四、衿附、　五、後襠附、　六、袖附、

一、**袖**　袖口布の下の端を淺く折つて押へ縫か、又は三つ折り紵けにして、表袖の袖口と縫ひ合せ、袷羽織と同じやうに袖口の留をして、その糸で袖下を縫ひ、袖口布の奥を折り、二糎位の針目にして、表に針目の目立たぬやうに注意して紵ける。

袖下は地厚物の場合には、外袖を四粍ずらして縫ひ、内袖の方に紵けつける。　地薄物又は縫ひ込みの少ない物は袖下を袋縫ひにする。　丸みと巾縫ひ代の二倍は淺縫を省く。

二、身頃　背縫は普通二重縫ひにする。耳に鋏を入れた場合、又は耳の色の異つて居るものは袋縫ひにする。

三、前襠附　前襠を向ふに、身頃を手前にして襠附の標を合せ、身頃を見て襠の出來上りだけを縫ひつける。

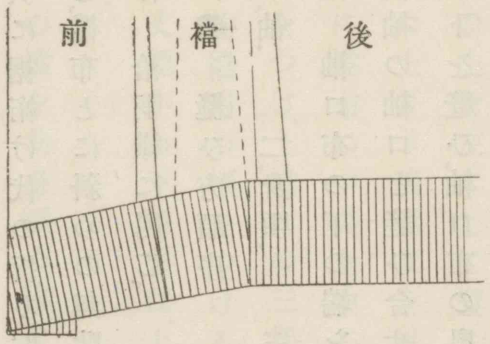


圖　裏を裾を半返した

次に裾は一旦形を整へ、標を正し、糸標をつけてから開いて裾の中折込みの標までを縫ひ、きせをかけて表返して裾を三つ折りにし躾をかける。

四、衿附　衿の折り方、芯の入れ方、衿附け方等袷羽織に同じ。但し紹等の仕立の場合には芯をとぢつける糸は共色の糸を用ひ、表からとぢ糸のすけて見えないやうに注意する。

五、後襠附　次に身頃を手前にして後襠と後身頃との丈の標を合せ、身頃は眞直ぐに、襠は標通りに合せて、裾紮け代の中折り込みの處まで待針を打つて縫ひ、きせをかけて表に返し、裾紮け代を前身頃にならつて折り、一糎五粍の針目で表に目立たぬやうに注意して紮ける。

六、袖附　袖附の留は袖下の折り山に、表袖の裏から針を出して襠の上で身頃の後前のきせ山を突き合せて、布を横に抄ひ（襠の布は抄はぬこと）最初の針にならべて表袖の折り山の際に表から針を入れて糸を結び、その糸で袖附をする。袖をつけたならば、襠の縫ひ代を脇縫ひ代に紮けつけ、更に脇縫ひ代の耳を折つて身頃に紮けつける。身頃の縫ひ代の少ない物は襠の縫ひ代を身頃に紮けつけ、次に八つ口を紮ける。

注意　一、セル地を以つて男子の單羽織を縫ふには裾紮け、襠附の縫ひ込み等は全部千鳥掛とし、袖口の奥も千鳥で押へる。尚丁寧にするには、袖附の縫ひ目は半返し縫ひにして割り、その他の要所も半返し縫ひにする。

備考　一、單羽織の裁ち方に於て襠の補ひ丈は何故に必要かを説明せよ。
二、男物單羽織の襠の標附け方を問ふ。
三、男物單羽織の縫ひ方順序を問ふ。

第三章　薄物單衣

薄地物には紗・絽・絽錦紗・透綾・明石縮・絽縮緬・上布等がある。

㊀　裁ち方

裁ち方をする前には必ず火熨斗をかけ、棒に卷いて折り目のないやうに布を平にして裁ち方にかゝる。薄地物は布がずれ易いから注意して折り疊み方を正しくし、要所には待針を打つて動かぬやうにする。絹布類は丈が長いから、殘り布から脊の切り伏せにする布を巾二糎、丈は接ぎ合せて身丈になるだけ取る。但し布の巾の廣い物は衽・衿の巾の間から取り、接ぎ目なしにする。

㊁　標附け方

角篦を用ひず、燒烙鏝で標附けするのが正確で、且つ明瞭でよい。なるべく小さくつける。

その標附けの時、極く地薄のものはきせを極めて少なくして標をつける。布はずれ易いから待針を打つか、又は躾をして動かないやうにしてする。

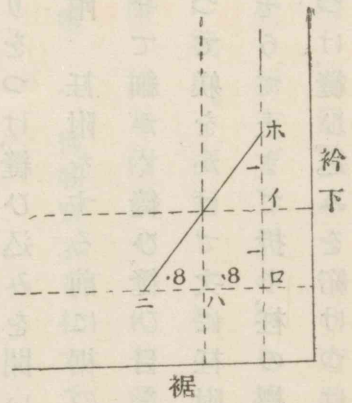
一、**袖**　袖下は外表にして極く淺い縫ひ代で縫ひ、割つて縫ひ目を縫ひ代だけずらし、裏返して標をつける。

袖口紵け代は五粍位として、耳のつれて居る物、又は巾の廣い物は裁ち切つてもよい。他は普通にする。

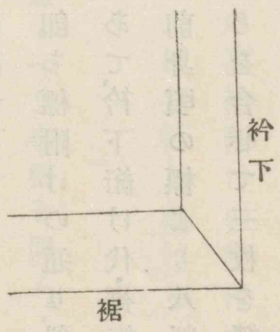
二、**身頃**　繰越しの分は後身頃の身八つ口より二糎下に揚をする。その標附け方は男物の內揚の仕方に同じ。

三、**衽・衿**　全部普通單衣と同じに標を附ける。尙、衽の裾には額緣の標をする。

額緣の標はまづ裾の裁ち目より一糎づつ二本標をつけ、衿下の方に一糎五粍を計り、その中間に標をつける。イ・ロの巾をホに移し、ロ・ハの巾をニに移し、ホ・ニの間に斜線を引いて、縫ひ合せの標にする。



圖の方け附標緣額



圖の上り來出緣額

㊂　縫ひ方順序

一、袖、二、脊縫、三、脇縫、四、衽附、五、衿附・共衿、六、袖附

針目は全體細かく三粍位とし、地質によつてはもつと細かく縫ふ。糸はなるべく繼がぬやうにする。もし繼ぐ時は撚り繼にするがよく、場所によつては木綿物と同じやうに重ね繼でもよい。縫ひ目には必ず平烙鏝をあて、折り烙鏝は決して使はない。明石縮のやうな、しぼのあるものは特に注意して伸ばさないやうにする。

一、**袖**　袖口は細い撚り紵とするか、又は極く細く三つ折り紵にする。袖口布をつける場合は男物單羽織のやうにする。

二、**背縫**　耳の變つたものはそのまゝ袋縫ひにするか、又は裁ち切つて、袋縫にすることもあるけれども、主に地薄物は肩當・居敷當を用ひないから、背縫は切り伏せとて、共布又は同じ色の布を背の縫ひ目にあてゝ三枚一緒に縫ひ、折りをつけて一方に紵けつける。

三、**脇縫**　脇縫は普通に一度縫つて更に、脇縫より八粍離して今一條縫ひ、折りをつけ、縫ひ込みを開いて三つ折り紵けにする。

四、**衽附**　衽附をする前に裾の額縁を縫ふ。即ち標附けの通り、斜の標を合せて細かく縫ひ、縫ひ目を割つて烙鏝をあて、衿下紵け代・裾紵け代を折つて躾をかけて次に衽附をする。まづ前身頃の標より八粍多く標にそうて上まで折り、衽の標と前身頃の標とを合せて三枚を縫ひ、折りをつけ、縫ひ込みを紵けつけ、次に衿下及び裾を細かく紵ける。

五、**衿附**　普通單衣とつけ方は變らない。しかし地薄物は肩當がつかないから、斜布で月形の物を拵へて、衿肩廻りの裏衿附けの際につけて一緒に縫ふ。表返して衿の仕末をして紵け上げ、共衿をかける。

六、**袖附**　折り附にせずに普通につける。

備考　一、薄物單衣を仕立てるについて注意すべき事柄を問ふ。

第四章　丸　帶

丸帶の材料には、綴織・錦・唐織・繻珍・厚板・綸子・博多・羽二重・緞子・鹽瀨・紹・繻子等が主なものであるが、この外にもまだ澤山種類がある。

㊀ 普通仕立上げ寸法

大人物

巾　二六糎――三二糎

丈　三米八〇糎――四米二〇糎

子供物　十二・三歳用　十歳用　六・七歳用

巾　二六糎　二三糎　一八糎

丈　四米内外　三米五〇糎　二米九〇糎

㊁ 布の整理

一、表地耳直し　耳のあまり厚くないものは、腹合せ帶と同じやうに伸し、

耳の糸の硬く厚くて、しかも釣れて居るものは、その部分だけ切り取つて前のやうに伸す。

二、垂と手の織り出しの整理　垂と手の織り出しは、直角になるやうに、手で充分直し、尙全體の横の布目をも正す。この時少し濕りを與へてもよい。

三、地のし　裏から火熨斗をかけて全體の地のしをする。

芯の地のしは腹合せ帶に同じである。

注意　交織物は絹と綿とは熱に對して縮む度が違ふ爲、火力を用ひて耳を伸ばすと時には不同に伸縮することがある。この時は手で伸ばす方がよい。しかし全體に裏から一樣に、地のしをすることは差支へない。

㊂ 標附け方

一、布を二つに折り、織り出しを揃へて垂と手の假とぢをする。普通織り

出しは一つだけ出す。しかし品のよい物は好みによつて二つ出し、更に、その先の無地の處を三糎位出して仕立てることもある。

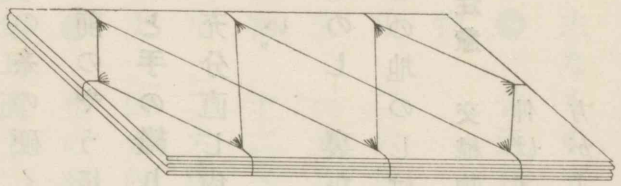
文字を織り出したもの(例へば繻子等)は文字の隱れないやうに且つ文字を巾の中央に格好よく据ゑる。手は垂と同じやうに織り出しを普通は一つ出し、無地の處を垂の方に出したならば、手も同じやうに垂と揃へて出す。

右のやうにして、丈の標をする。

二、巾の中央を、腹合せ帶のやうに四十糎おき位に、待針をして縫ひ目の外に假とぢをする。

三、仕立上りの帶巾よりも、二糎廣くして巾の標をかるく通し箆にしてつける。

圖の上り仕立帶丸



㊃　縫ひ方順序

一、縫ひ方　縫ひ方は、大體腹合せ帶に同じであるが、片側に縫ひ目がないから縫ふ必要がなく、又中央より少し手の方へよつた處を、帶巾より四糎位廣く縫はずに明けて置き、左右の端は四十糎程半返し縫ひにし、外は一針拔きに極く細かく、しかも縫ひ目の縮まぬやうに縫ふ。手や垂の端は横の織り糸を通して眞直ぐに半返し縫ひにする。

二、折りつけ方　縫ひ目に平烙鏝を充分にかけて手で兩端を折り、次に縱を折る。角は腹合せ帶と同じく縫ひ込みをとぢる。

三、芯の入れ方　芯は帶巾より二糎せまく裁ち切り、眞綿を引き、縫ひ込みの折れて居る方に芯を重ねる。芯の弛みは凡そ、四十糎について五糎位とする。帶皮のみを引張つて、芯の落ち着きを見、待針を打つて芯の丈を切り、兩端と一方の縱の縫ひ込みとに芯をとぢつける。芯には眞綿を引く。角を先に少し返しておいて、帶を卷き、縫ひ殘した處から、表に返して、腹合せ帶と同じやうにゾベ糸で縫ひ目に躾をかけ、縫ひ殘し

た處を細かく絎ける。

四、仕上げ　四角の角に引糸をつけ、その糸を引張つて角を眞四角に出して火熨斗をかけ、壓をおき、六つ又は八つに疊んで、紅白の絹糸でとぢをし菱に飾り糸をかける。

第五章　男　帶

材料の種類は、絹布には、博多織・繻珍・繻子・節糸織・琥珀・綾織・絽博多・紗等があり、綿布には、小倉・瓦斯小倉・紙布等がある。

㊀　普通仕立上げ寸法

	大人物	子供物
巾	一〇糎―一一糎	七糎―八糎
丈	三米八〇糎―四米一〇糎	二米五〇糎―三米

㊁　布の整理

女物と同じやうに耳を伸す。横の布目が明瞭な物が多いから、布目が正しくなるやうに裏から火熨斗をかけて、平にし、棒に卷いて充分に地伸しをする。

芯の地伸しも女物に同じである。

㊂・標附け方

巾を二つに折り、縫ひ代の邊を假とぢする。但し地質によつてはこのとぢを省く。巾の標を仕立上げ寸法より一粍位廣くして、輕く通し箆でつけ、次いで丈の標をもつける。

仕立直しの物は、前の折り目の出ないだけに巾、丈をつめる。又輪の方の折り目も、少し何れかへずらした方がよい。

㊃　縫ひ方(縫ひ仕立て)

兩端十五糎位宛殘して巾標の通り半返しに縫ふ。縫ひ目に平烙鏝をかけ、手で表へ輕く折りをつけて尺度で表へ引返し、表から縫ひ目の折りを正して芯を入れる。

一、**芯の入れ方**　芯は物によつて、一枚芯か、又は二枚芯にする。すべて巾いつぱいに入れる故仕立上げ帶巾より二粍位狹く裁ち切り、芯の一方に厚紙をつけて、その先に紐をつけ、紐の先に錘(おもり)になるものをつけて、一方から入れて引き出し、芯が正しく巾いつぱいに含まるやうに整へながら入れる。

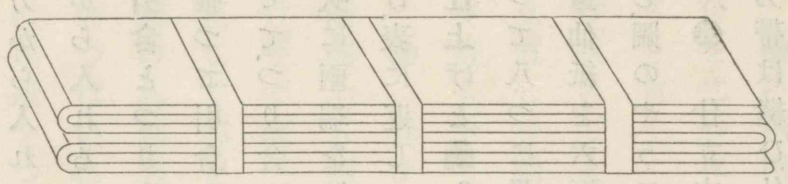
二、**引合とつり合**　一方で帶側と芯とを持ち、他の一方で帶だけ持つて引張つて引合をする。それから下に置き兩手で帶側と芯との三枚を撫でて、つり合をよくし、芯を丈いつぱいに裁ち切る。

次に兩端を縫ひ殘してある處から裏返して、半返しに縫ひ、芯をとぢつけ、表に返して殘りを細かく絎け上げる。

三、**仕上げと疊み方**　兩端から火熨斗をかけて、仕上げをし、丈を二つに折つて八つに疊み、兩端を腹合せ帶のやうにとぢて壓をかけ、次に半紙か畫仙紙を六糎位の巾に切り、二本接いで、巾を三つ折りにして、二糎巾とし、圖のやうに三箇所を卷き、しつかりと締めて貼りつける。

㊄　仕立方別法(絎け仕立て)

男帶は縫ひ仕立の外に、絎け仕立にすることがある。それは巾標をい



圖の上立仕帶男

つぱいにつけて、表を出して標の通り、縫ひ代を裏へ折り、芯をとぢつけて、端を縫ひ、メリケンの八番位の針で、細かく針目の流れぬやうに注意して絎ける。この時糸をゆるめぬことゝ、絎け目がつれないやうに注意することが大切である。

第六章　小袖・模様及び紋について

㊀　小袖

小袖の着物とは古は絹布の綿入に限つた稱へ方であつたが、現今は、汎く男・女袷、綿入にかゝわらず、表裏絹布の着物を小袖といつて居る。

小袖の種類には裾廻し附と、無垢とがある。

イ、裾廻し附　紋及び裾模様のつかないものは、裾廻し布には無地、型附、模様物等、調和のよいものを用ひ、女物は女物袷に、男物は男物袷と大體變りがない。

ロ、紋及び裾模様のつくものには、一枚物もあり、重ね物もある。又裾廻しは共布を引返しにして置く物が多い、この引返しの物を無垢といふ。

紋附類は、大抵無垢である。但し小紋の紋附は稀に變り色を裾廻しに使ふことがある。

小袖の材料の地質には、縮緬、羽二重、錦紗、綾織、紋織、大島、銘仙、米澤織、斜子、八丈等がある。

㊁ 模様の種類

總模様　全體に模様をつけ、振袖とし、紋はつけぬことが多い。

島原模様　裾の方は、裾模様の如く、又胸の邊にも模様をつけたもので、袖は振袖とし模様をつける。

裾模様　衽・前・後と次第に模様を低くつけたものである。振袖は袖にも模様をつけ、止袖は模様をつけぬ。

江戸褄模様　衽から前身頃へかけて模様をつけ、その高さは人々の好みによつて七十糎位から三十五糎位にする。

褄模様　衽にのみ模様をつける。

片褄模様　下前の裏衽にのみ模様をつける。

袵模様　袵にのみ模様をつける。

裾模様　後がかり總模様

熨斗目模様　腰と袖とに模様をつける。これは男子用に多い。

右のやうな男女の模様物には、凡て三個所又は五個所に紋をつける。

㊂　紋所の位置及び寸法

	本裁女物	本裁男物 四つ身	三つ身	一つ身
背紋下り（衿肩裁ち切りより）	六糎五粍	七糎	六糎	五糎五粍
袖紋下り（袖山より）	七糎五粍	八糎	七糎	六糎
抱紋下り（肩山より）	一五糎	同上	一三糎	一一糎五粍
				五糎五粍
				一〇糎

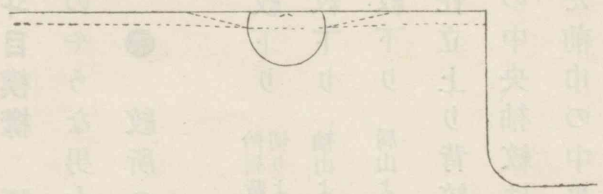
仕立上り背紋下りは、これより一糎強を減じたものである。背紋は背縫の中央、袖紋は袖巾の中央、又は少し袖附へよせる。抱紋は衿肩明を除いた前巾の中央につけるものである。

㊃　紋の縫ひ方

背縫をする前に、紋の部分のみを表より兩身頃を揃へて出來上りの形に右身頃の上に左身頃をのせて、折り山の極く際を紋合せのくずれぬや

うに朕糸で一針ぬきに押へておく。この形を整へる爲に烙鏝をかけることもある。次に裏返して背縫ひのきせのかからぬやうに白い部分のみをなるべく細かく一針ぬきに縫ふ。縫ひ糸は、白の絹糸、或は羽二重糸を用ふ。袷、綿入等すべて裏のつくものは、紋合せの糸を紋の上下四糎位づゝ耳の方で斜に縫ひ出して置く。

紋合せの圖



次に背縫ひの、本縫ひを普通の縫ひ方で縫ふ。紋の際まで上下二糎位の處より紋の縫ひ目に合ふやうに斜め縫ひにし、紋の際で、細かく一針返す。

但し紋の部分は、中の地色の處は、地色の糸で縫ひ、又白い處の長い紋は白い糸の上の處を一・二個所小針に縫つて糸の弛みをふせぐ。

薄地物の時は縫つた糸が表から、すけて見えぬやうに注意する。

第七章　小袖袷重ね

❶ 小袖重ね下着の寸法つめ方

女物袷重ね

袖丈	七粍つめる	上着より
袖口	三粍つめる	上着より
袖附	四粍つめる	一糎内外つめる
袖巾	四粍つめる	四粍つめる
身丈	二粍つめる	七粍(人形で三粍つめる)
後巾	二粍つめる	四粍つめる
前巾	七粍つめる	二粍つめる
衿肩明	三粍つめる	七粍つめる
		三粍つめる

男物袷重ね

袷丈　左右各一糎つめる　一糎つめる

肩巾　四粍増す　四粍増す

裄・身八つ口・衽巾・合褄巾・衿下・衿巾・衽下り等は同寸法である。

右は二枚重ねの時の寸法つめ方である。稀には三枚重ねもある。三枚重ねの時には、中のものを普通の寸法に仕立て、上下着物の寸法を右の割合で増減するものとすればよい。

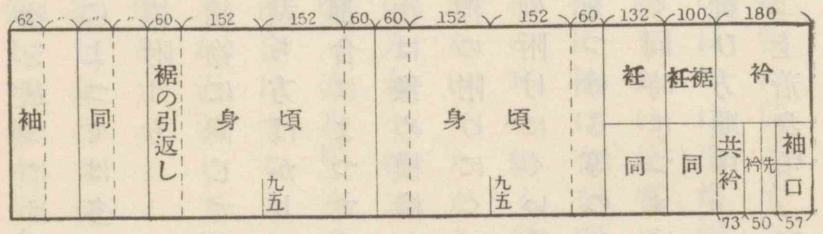
以上は上着・下着とも同地質のものを標準としての寸法のつめ方であつて、地質の違ふ物は、適當に加減することが大事である。即ち上着縮緬で、下着羽二重等を重ねる時には、縮緬にもよるけれども下着の身丈を上着より却つて長くするものである。又身丈ばかりでなく袖丈や裄等も加減することが必要である。

㊁　裁ち方と積り方

裁ち切り寸法は、男物は男物袷に、女物は女物袷に大體同じである。

女小袖無垢一枚の裁ち方

用布並巾　15米8糎



積り方

公式

袖丈×4＋身丈×5－衽下り＋裾の引返し×4＋衽裾＋衿丈＝總用布

紋附・模様物を裁つには、充分注意して、紋又は模様を合さねばならぬ。模様の具合によつては多少寸法を斟酌しなければならないこともある。

㊂ 標附け方

大體木綿物に同じであるけれども、裏は木綿物より稍少なくつめる。模様物は裁ち方ばかりでなく、標附け方に於ても充分注意して模様を合せ、模様の都合によつては寸法を多少斟酌しなければならぬこともある。且つ模様物は、豫め模様を合せて糸標をつけてからする。又地質によつて重ねて標の附けにくい物は針でよくとめてし、物によつては一枚づゝする。標の附けにくい物は絹布標附用の烙鏝を溫めて標をつけてもよく、又糸標をつける等のことが必要である。標附け方は、上着・下着・表・裏とも、なるべく同時につゞけてする方がよい。

㊃ 縫ひ方順序

一、袖、二、上着身頃、三、下着

大體木綿物に同じであるけれども、材料の取り扱ひ方に充分な注意が要る。縫ひ目には平烙鏝をかけ、きせをかけて折り目に烙鏝をかける。要所には躾をかけ、地質によつては縫ひ躾をかける。

一、袖　裏袖に袖口布を廻しがけにし、袖口を表裏合せて縫ひ、綿を入れる時は、眞綿の耳を細く裁ち切つて入れる。袖の仕立て方は木綿物と大體變りがない。ただ八つ口が地薄ならば紅絹・白絹等裏と同色の細い布を芯に入れて縫ふこと等も必要である。

二、上着身頃　表身頃・裏身頃の背・脇縫・衽附をし、裾合せをする。凡てよく模様物は合はすことが大切である。褄をあげ、裾には眞綿を少し引のばして入れ、表返して裾合せをした處から針を入れてよく綿を含めて躾をかける。

縦とぢをし、身八つ口を縫ひ、袖附・衿附・共衿掛・裾とぢをして仕上げる。

三、下着　通しの物と、胴抜きの物とあつて一様にはゆかぬけれども、要す

るに着用して着崩れのせぬやう上着とよく重なることが大切である。特に男物の重ねは、女物より一層寸法を正確にして、裄・衿先等の不揃ひのないやうに注意する。表は模様の都合によつて身巾が多少寸法通りにゆかぬこともあるから、下着も上着に準じて仕上げるのである。標附け方は上着に準じ、縫ひ方も袷重ねならば上着の通りただ寸法をつめるばかりで、衽の大きさ、褄の形等上着と違はぬやうに注意し、その他はすべて上着の通りである。

附記

一、小袖綿入重ね下着の寸法つめ方

女物綿入重ね

袖丈	一糎内外つめる
袖口	四糎つめる
袖附	四——八糎つめる

男物綿入重ね

袖巾	四糎つめる
身丈	四糎つめる
後巾	四糎つめる
前巾	八糎つめる
衿肩明	四糎つめる
衿丈	左右各一糎つめる
肩巾	四糎増す

一糎——一糎二糎つめる
六糎つめる
一糎つめる
四糎つめる
四糎つめる
八糎つめる
四糎つめる
一糎つめる
四糎増す

二、綿入重ねは上着を口綿とし、下着全體に綿を入れるのが普通であつて、好みによつては上着全體に綿を入れ、下着を口綿にしてもよい。

三、綿入重ねには小袖綿を入れることもあるけれども、眞綿を入れる方がよい、袵にも眞綿を入れると、裾さばけがよいが、袵の太い物は小袖綿を芯にすることもある。

眞綿は着物の形に出來た物を入れる時は、あまり困難を感じないが、もし袋眞綿を入れる場合は、よく引きのばして綿のつれぬやうに、平において

その上に火熨斗を輕く當てゝ落ちつかせて表に返す。

第八章　比　翼

比翼とは、一枚の着物で袖口・八つ口・裾廻し等すべての廻りを二枚重ねのやうに仕立てたものをいひ、本比翼と附比翼とがある。本比翼とは、上着を仕立てる際下着を共に縫ひつけたもので、附比翼とは、普通の着物の下に、下着廻しを附けたものである。それに袷、綿入の別がある。比翼は口綿のものが多いから本章では主として口綿本比翼を述べる。

㊀　裁ち方と積り方

比翼無垢表の布數と裁ち切り寸法

上着		下着	
袖	二枚　六二糎	表袖口被	二枚　五七糎
身頃	二枚　一五二糎	袖口布	二枚　五七糎
衽	二枚　一三三糎	衿	一枚　一八〇糎

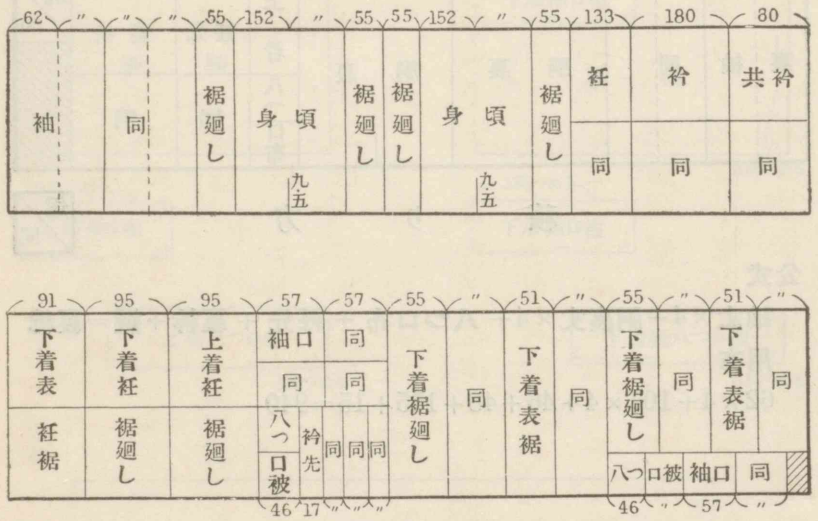
衿	一枚	一八〇糎
共衿	一枚	八〇糎
裾廻し	四枚	五五糎
衽裾廻し	二枚	九五糎
衿先布	二枚	一七糎
袖口布	二枚	五七糎

比翼無垢に要する布數は總計四十二枚である。このやうに布數が多いから、積り方にはよほど工夫が要る。まづ袖丈・身丈・衽丈・衿丈等の裁ち切り寸法を仕立て上げ寸法によつて定め、次に袖口布五十七糎、共衿七十糎以上、衿先布二十糎、衽裾廻し九十糎、八つ口被四十五糎位の標準で適宜に寸法を定め、これ等を總用布より減じて殘りを調べ、次に裾廻しの丈を定め、その長短によつて多少他の寸法を加減し、又は裁ち合せを考へる等

共衿	一枚	八〇糎
衿先布	二枚	一七糎
表八つ口被	四枚	四六糎
表裾	四枚	五一糎
裾廻し	四枚	五五糎
表衽裾	二枚	九一糎
裏衽裾廻し	二枚	九九糎

比翼無垢表の裁ち方

並巾用布　22米88糎



積　り　方

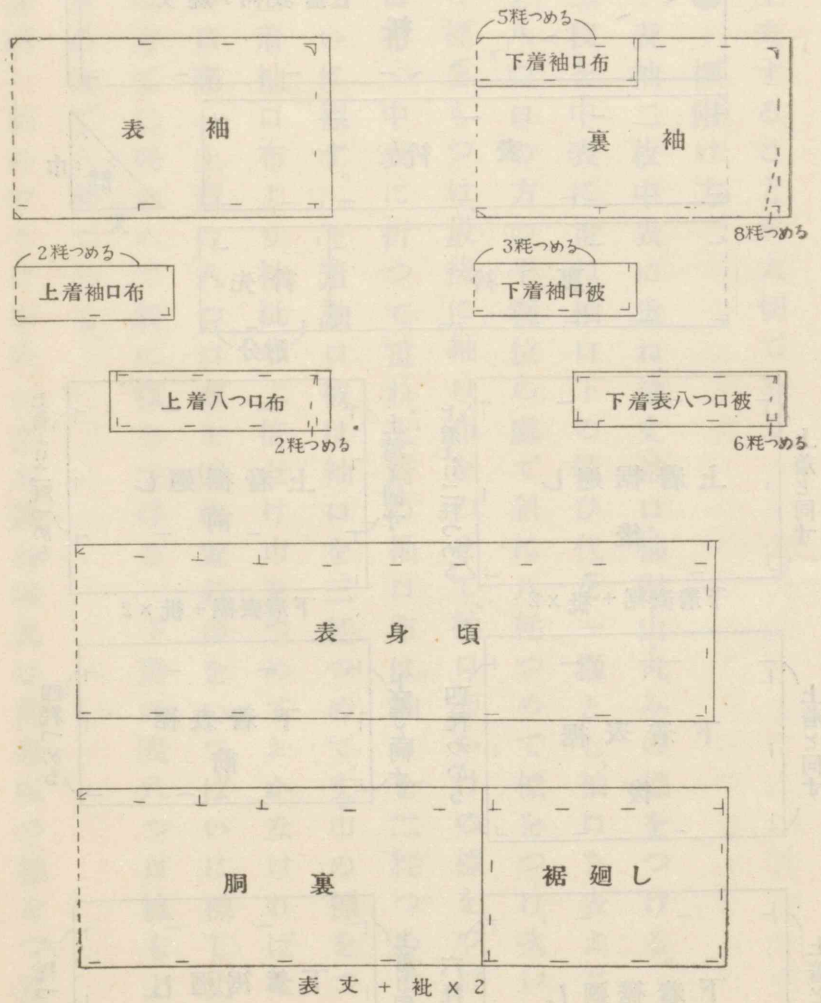
公式

袖丈×4＋（身丈＋裾廻し）×4＋衽丈＋衿丈＋共衿丈＋下着衽裾＋上下衽裾廻し×2＋袖口布×2＋（下着表裾＋下着裾廻し）×4＝總用布

62×4＋（152＋55）×4＋133＋180＋80＋91＋95×2＋57×2＋（55＋51）×4＝2288（糎）

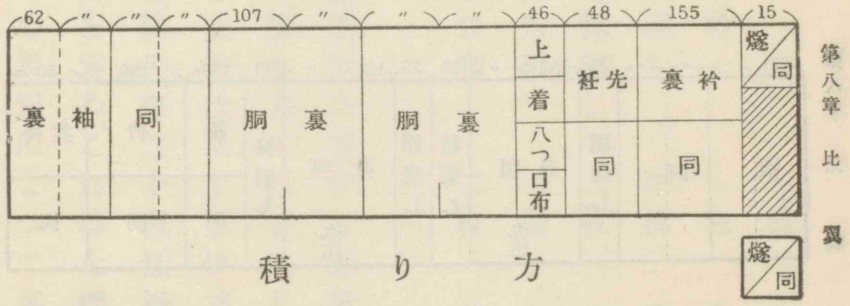
別に縫切を要す

標附け方圖



比翼胴裏の裁ち方

並巾用布　9米40糎



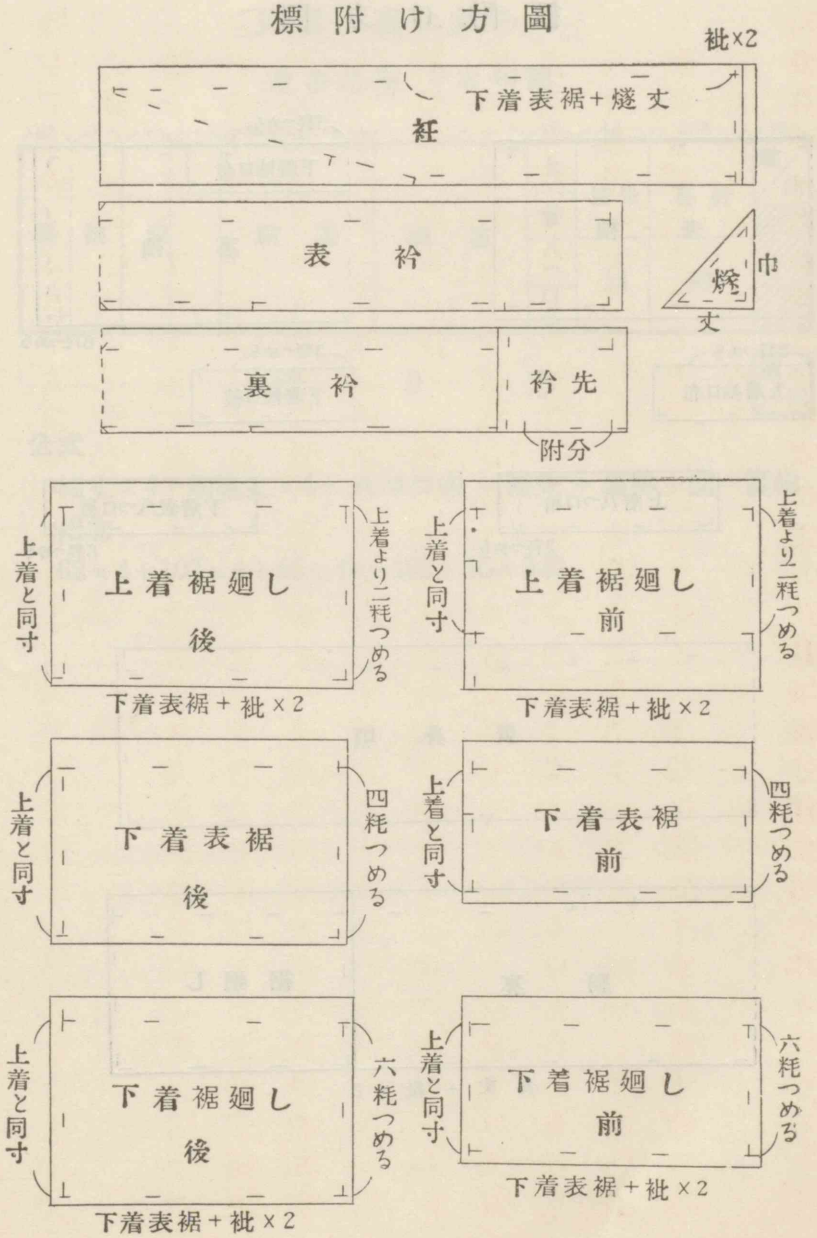
積　り　方

公式

袖丈×4＋**胴裏丈**×4＋**八つ口布**＋**衽先**＋**裏衿**＋**燧**＝**裏總用布**

62×4＋107×4＋46＋48＋155＋15＝940

標附け方圖



種々工夫することが大切である。

❶ 標附け方

一、**袖**　表袖二枚中表に重ね、袖丈・袖口・袖附・山・丸みの標をつける。裏袖二枚を中表に重ね、袖口下の縫ひ代を一糎とし、袖口を表より五粍つめ、丈を八つ口の方の十糎位の處で斜に八粍つめて標をつけ、次いで丸み・山等の標をもつけ、最後に袖口布をのせて、袖口布かけの標をつける。

二、**袖口布**　中表に折つて重ね、上着の袖口布は袖口を二粍つめ、巾・丈をいつぱいに標す。下着袖口被は袖口を三粍つめて、丈・巾の標をつけ、而して上着袖口布より袖袵の二倍だけ巾をつめておかなければならない。

三、**八つ口布**　上着の八つ口布を四枚重ね、巾をいつぱいに標し、丈を八つ口の方で二粍つめて斜に標をつける。下着の表八つ口被も上着の八つ口の方で六粍つめる。

四、**表身頃**　例のやうに中表に重ね、後身頃及び前身頃の標をつける。

五、**燧布**　表裏の燧布を中表に重ね、丈、巾の縫ひ代をいつぱいに標をつける。

六、**胴裏と裾廻し布**　胴裏を中表におき、その上に裾廻し布(上着下着の分)八枚を揃へて重ね、表身頃より袵の二倍長くしておき、胴接ぎ・丈・燧の巾・身八つ口・巾・衽下り等の標をつける。後前ともそれぞれ重なる順序を考へて裾の方で順に巾を少し宛つめて標をつけることは標附け方圖の通りである。下着の表裾は裾廻し布より袵の二倍だけ短かく標をつけ、後前とも裾の方で巾をつめておくことは前に述べた通りである。

七、**衽**　上着、下着の表衽を揃へ、同じく裏衽、裾廻しを揃へ、裏の分は裾で袵の二倍長くして重ねておく。八枚重ねて標つけることが困難ならば四枚宛つけてもよい。丈・衿下・衽巾・合褄巾・衿附及び衽附の方に四裾の高さと燧布の丈の標をつける。

八、**衿**　裏衿二枚を中表におき、その上に衿先布を重ねて接ぎ代を標し、更にその上に上着下着の表衿をのせて、衿丈を標し、表衿を除いて裏衿を出し、衿丈標より十五糎(衿先裏衿接ぎの標より四糎位下)計つて標をつけ、衿の附け分けの標とする。尚外に合標をつける。

㊂　縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、裾廻りの縫ひ合せ、四、裾合せ、五、衿附、六、袖附、七、共衿。

一、**袖**　裏袖に袖口布をかけ、上着及び下着の袖口を縫ひ、袖口に綿を含めて留をし、袖口布の丈までそれぞれ四つ縫をする。次に表袖と裏袖とを合せ、袖口下より袖下の三分の二の處まで四つ縫ひをし、それより先は表裏別々に袖下を縫ひ、次いで八つ口布、及び八つ口被の袖下をも縫ひ、八つ口を合せて縫ひ、綿を少し含めて八つ口布の奥及び袖口布の奥を、それぞれ合せて縫ひ、裏袖及び袖口かけの縫ひ目にとぢつける。

注意　袖口布奥合せの時、上着袖口布の山を少し摘んで襞を取り、丈標を合

せる。

二、**身頃**　上着表身頃の背及び脇縫・衽附・衿附まで普通綿入の表のやうに縫ふ。胴裏と下着裾廻しとの胴接ぎの標を合せて縫ひ、折りをつけ、(隠し躾はかけぬ)背及び脇縫・衽附・衿附をする。

三、**裾廻りの縫ひ合せ**　上着裾廻し及び下着表裾の背・脇を縫ひ、前裾の上部に燧をつける。この時燧布の斜の處をのばさぬやうに、又横布にならぬやうに注意する。折りは燧布につけ、隠し躾をし、次いで下着表裾及び上着裾廻しにそれぞれ衽を附ける。

四、**裾合せ**　上着表と上着裾廻し、下着表裾と下着裾廻しとをそれぞれ裾合せをし、褄を揚げ、裾に綿を入れ、假とぢをして衿下を縫ひ、背及び脇の縫ひ目をとぢる。次に上着裾廻しと下着表裾の上部を燧布の端から他方の端まで縫ひ合せ、胴接ぎの縫ひ目にとぢつけて、表より隠し躾をする。下着表裾の衽と上着衽裾とを縫ひ合せ、下着裏衽附にとぢつける。

注意　地質の重いものは胴接ぎを四枚一緒にする方法を用ひ、折りには表から縫ひ躾をかける。

五、**衿附**　下着の表衿と裏衿とで下着衽を挾んで衿の附け分けの標まで縫ひ、上着の裏衿を附け分けの標までつける。それよりこの三枚の衿を重ねて、重なりの順序に針を通して、しつかりと附け分けを留め、次に上着裏衿・下着表衿・下着裏衿の三枚で裏身頃を挾んで衿附をし、折りをつけ、表衿附の縫ひ目にこの三枚の衿附の縫ひ目をとぢつける。

注意　一、地厚のもので衿の縫ひ代の高くなるものは、下着裏衿は裏身頃にあて、下着表衿と上着裏衿は中表にとぢ合せて三枚一度につける。この二枚の衿の縫ひ代は身頃の中に入るやうになる。この時は衿肩廻しの處は縫ひ代が深くなると、工合が悪いから注意する。

二、上着の衿巾は衿肩で八粍位つめると着用して工合がよい。

それぞれ衿先を整へ、衿巾に折つて三つ衿を入れ絎け上げる。但し衿絎は袖附終へてからする。

六、袖附　身八つ口を縫つて綿を含め、袖附を女物袷のやうにし、上着の八つ口布と下着の八つ口布の袖附より上の部分は裏袖附にとぢつける。

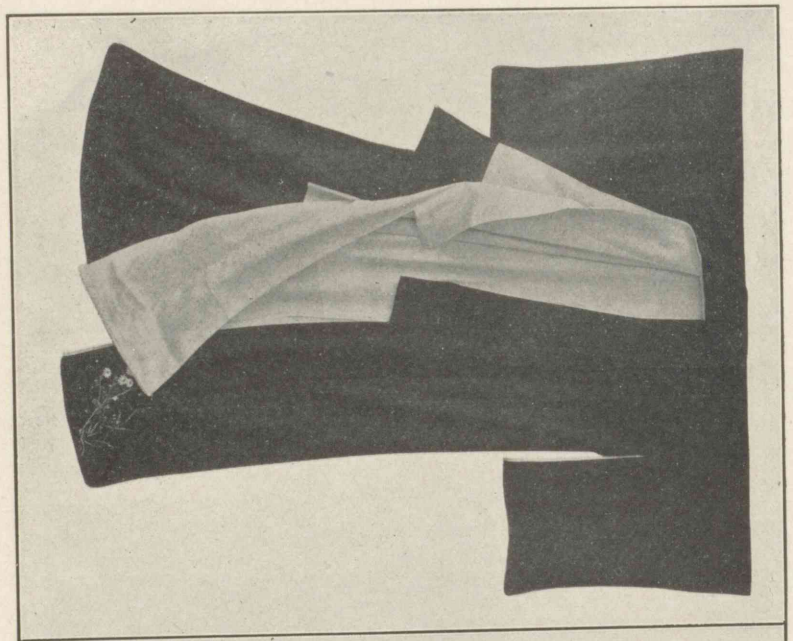
七、共衿　各部とぢ殘しのないやうに全部とぢ合せたならば、共衿を普通にかける。

附比翼

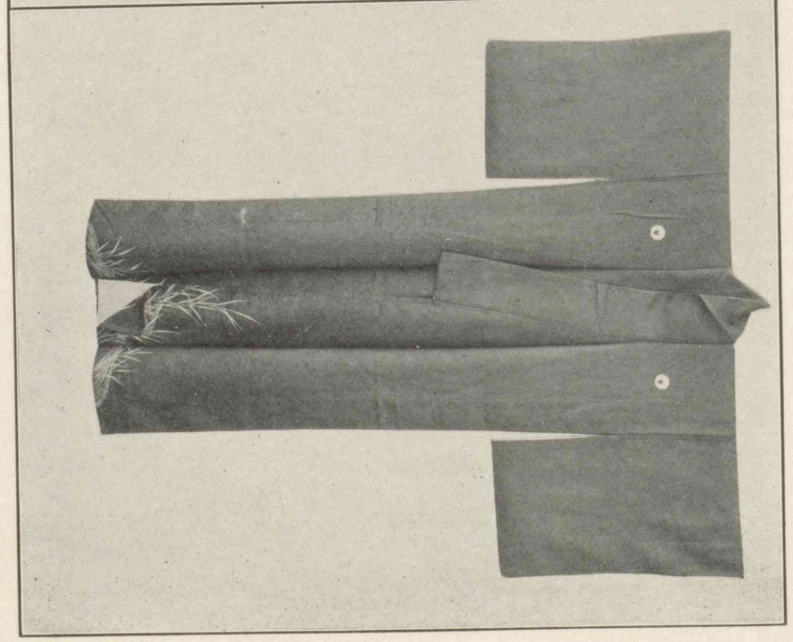
下着の廻りを別々に縫ひ、これを仕立て上つた上着に絎け附けたものであつて、本比翼のやうに見せる。裾の丈が長ければ燧布はいらない。

縫ひ方

上着を普通の小袖に仕立て、次に下着の袖及び身頃の各部卽ち袖口・八つ口・裾廻りの上・衽・衿附等の裏を四粍ふかせて縫ひ、その山を下着の各部の縫ひ目に合せて絎けつける。衿丈も片方で六粍位つめて縫ひ、衿肩廻



本比翼



單衣本重ね

しの處で上着を弛めにし、衿先を揃へて附ける。

備考

一、衿の附け分けの標とは何か、

第九章　單衣重ね

單衣重ねは禮裝に使ふもので、本重ね・半重ね・八掛附き本重ね等の種類がある。本重ねとは上着に裾模様物を用ひ、下着には白一枚分を重ねて縫ひ合せたものをいひ、半重ねとは本重ねと同じやうにみせて、周圍にのみ下着を附け、胴は上着一枚にして仕立てたものである。八掛附き本重ねとは、本重ねの上着にも下着にも八掛を附けたもので、正式には上着・下着・及び八掛共同じ裾模様を附けるのであるが、上着にのみ裾模様をつけることもある。

本來、袷重ね、綿入重ねのやうに普通單衣仕立ての物を二枚重ねて、その縫ひ目卽ち、背・脇・衽をとぢて着るものであるけれども現今は、着用の便宜上仕立方を工夫して、二枚縫ひ合せて仕立てるやうになつた物であるから、その地質・色合等によつては別々に仕立てて、着る時とぢつけることもある。地質は、上着には紹・紹縮緬・縮緬・羽二重・麻等を用ひ、下着には白、又は薄色の紹・紹縮緬・練・麻等を用ふ。

第一　單衣本重ね

㊀　普通仕立上げ寸法

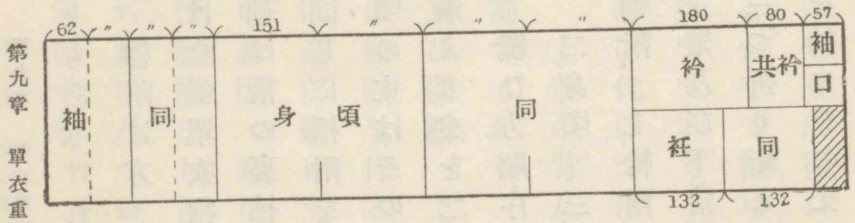
上着寸法は普通單衣の通りにし、下着の巾のつめ方は普通袷の裏のつめ方位に、丈は地質の伸縮に注意することが大切である。

㊁　裁ち方と積り方

上着の裁ち方は、普通女物單衣に同じ。但し袖口布を要す。下着の裁ち方は上着に同じ。但し衿裏を

本重ね上着の裁ち方

用布並巾　11米69糎



積り方

公式

(總用布－袖丈×4＋裁ち切り衽下り×2－袖口布)÷6＝身丈

(1169－62×4＋21×2－57)÷6＝151

取ることもあるけれども、それは用布の丈の長い物に限る。

㊂ 標附け方

上着は全部單衣物に同じ。

下着の袖は袷の裏袖の標附と同樣に八つ口の方で、袖丈を三粍つめ、他は表袖と同じに標附をする。

下着身頃の丈はその地質によつて加減をする。

衿は上着より丈を二粍つめる。

㊃ 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、衿下及び裾紵、四、下着の身頃、五、とぢ及び八つ口縫、六、袖附、七、衿附、八、共衿、

一、袖　上着及び下着の袖口布の下を二つ折にして押へ縫をし、(物によつては三つ折り紵とし)上着袖に袖口布を合せて袖口を縫ひ、留をして袖口下を袖口布の丈まで四つ縫ひにし、下着袖に袖口布をかけて留をし、上着のやうに袖口下を縫ひ、縫ひ代を斜に表に折つて自然に上着の縫ひ代と合せて、袖口下から袖下の中途まで四つ縫にし、それより先は別別に縫つておく。袖口布の奥を袖に紵けつけ、丸みを作り、八つ口を合せて、縫ひ代いつぱいに奥を縫ひ、折りを標通りつけて表返す。

二、身頃　上着の背及び脇縫をし、衽を附けて折りを普通につけ、脇の縫ひ代を割つておく。

三、衿下及び裾紵　上着の衿下及び裾紵けをする。裾の角は絹布單衣のやうに額縁を作る。下着の衿下を紵け、裾は縫ひ込みになる分を除いて、他は全部紵けておく。

四、下着の身頃　袷の裏のやうに縫ひ代を中に入るやうに布を合せて、背縫及び脇縫をし、衽を附けて折りをつけ、脇の縫ひ代を割つておく。

五、縦とぢ及び八つ口　背脇の縦とぢをし、八つ口を縫ひ、裾の處で縫ひ代の仕末をする。

六、袖附　袖附の留を袷のやうにして、上着下着の袖を附け、折りを上着は袖に、下着は身頃につけて次に衽をとぢる。

七、衿附　まづ初めに下着の表衿と裏衿の衿先を合せて衿丈の標より五粍先の處を縫ひ、引返して衿先にきせをかけ、次に上着の裏衿を下着の表衿に合せ、三枚假にとぢつけて、上着の表衿を上着の表衽に、下着の裏衿を下着の裏衽にあて、衿を四枚一緒に縫ひ附け、衿の中をよく仕末して三つ衿を入れ上着・下着とも衿巾を定めて絎け上げる。

上着の衿巾は肩の邊で四粍位控へる方が着て工合がよい。

八、共衿　上着は普通に、下着は衿附の縫ひ目から五粍離して共衿をかけ、次いで衿糸をつける。

縫ひ方別法(縫ひ方順序)

一、袖　上着及び下着の袖口布の下を二つ折にして押へ縫をし、上着の袖に袖口布を合せて縫ひ、袖口下に四つ留をして袖口布の丈まで四つ縫をして、袖口布の奥を袖に絎け附ける。下着の袖に袖口布をかけ、四つ縫にすることは上着に同じ、袖口布の奥を袖に絎けつけることも上着に同じ。上着・下着とも袖下を袋縫にして袖口下の處のみ四つ縫にし、袷の袖裏のやうにする。丸みを作つて引返し、八つ口を別々に絎ける。

二、身頃　上着の背及び脇縫をして衽を附け、折りを普通につけて脇の縫ひ代を割る。

三、衿下及び裾絎　上着の衿下を絎け、裾絎も普通にし、下着の衿下を絎け、裾は縫ひ込みになる部分を除いて全部絎ける。

四、下着の身頃　下着の背及び脇縫をし、衽を附けて、折りをつけ、脇の縫ひ代を割つておく。

五、縦とぢ及び八つ口　背脇及び衽の下の方をとぢ、八つ口を縫ひ、裾の方の始末をする。

六、袖附　袷の袖附のやうに留をして、上着の袖附及び下着の袖附をし、上

六、着は袖の方へ、下着は身頃の方へ折りをつける。

七、**衿附**　上着の衿と裏衿とで、上着の身頃を挾んで衿をつける。次いで下着も同様に衿をつけ、衿先を縫ひ、上着と下着の衿附をとぢる。それよりそれぞれ衿巾を定めて紮け上げることは、前の方法に同じ。

八、**共衿**　共衿のかけ方、前の方法に同じ。

第二　單衣半重ね

㊀　普通仕立上げ寸法

普通仕立上げ寸法及び地質等は本重ねに同じ。

㊁　裁ち方と積り方

上着の裁ち方は、普通の本裁の通りにする。但し袖口布の要ることは本重ねの通りである。

半重ねの下着は名の如く、下半身並びに、袖・衿を普通につけるものであるから、その身頃は腰の處まで、卽ち九十糎位の丈とし、布が充分ある時でもその高さは今少し多くする位にして、常に腰紐を締めた處に紮けつけるやうに注意して裁つ。

㊂　標附け方

重ねを略した部分を除く外何れも本重ねに準ず。

㊃　縫ひ方順序

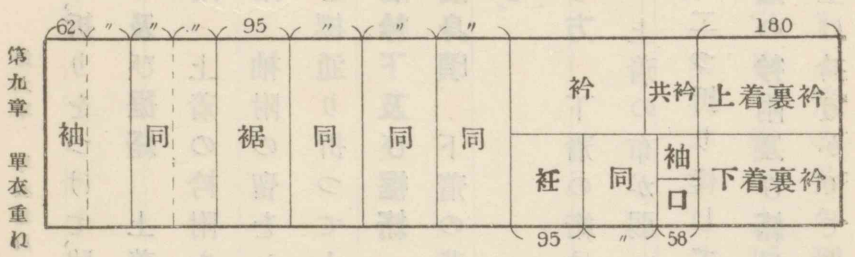
一、袖、二、身頃、三、衿下及び裾紮四、衿附、五、袖附、六、下着の衿下及び裾紮、七、下着身頃、八、とぢ方、九、下着衿附及び紮け方、十、共衿、

一、袖　袖の縫ひ方は本重ねに同じ。

二、身頃　上着の背及び脇縫をし、衽

半重ね下着の裁ち方

用布並巾　10米56糎



積り方

公式

袖丈×4＋**裾丈**×4＋**衽**×2＋**袖口布**＋**衿丈**＝**總用布**

62×4＋95×4＋95×2＋58＋180＝1056

をつけ、折りをつけて、脇の縫ひ代を割つておく。

三、**衿下及び裾絎**　上着の衿下及び裾絎等全部普通單衣の通りにする。

四、**衿附**　上着の衿附をいつもの通りにする。

五、**袖附**　袖附の留をして上着の袖を縫ひつけ、折りをつける。下着の袖附を標通り折つて上着の袖附の縫ひ目に絎けつける

六、**下着衿下及び裾絎**　下着の衿下及び裾絎を普通本重ねのやうにする。

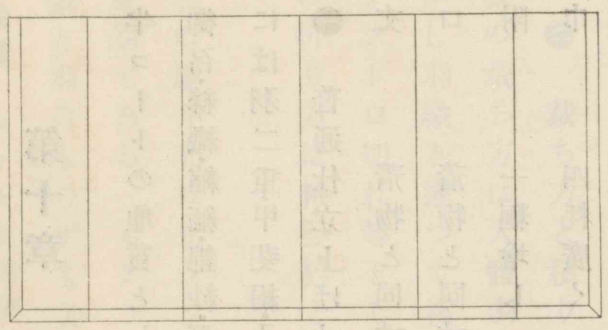
七、**下着身頃**　下着の背縫及び脇縫をし、衽をつけて圖のやうなものをつける。

八、**とぢ方**　下着の絎け代を折つて躾をかけ、調子をよく整へて絎けつける。上着の布が弱いか、又は下着が重くて垂れるものの場合には、絎け代は二つ折りにして、その上を耳絎けのやうにして絎けつける。

九、**下着の衿附及び絎け方**　下着の衿及び衿裏で衽を狹んで衿をつけ、その上は衿ばかりであるから、そのまま衿を二枚合せて縫ひ、衿先を作つてこれを上着の衿の廻りにとぢつける。衿の中を整へて三つ衿を入れ、衿巾を定めて絎け上げる。

十、**共衿**　共衿の掛け方は本重ねに同じ。

圖の着下ぬ重半衣單



第十章　袷半コート

袷半コートの地質としては、毛織物にはセル・カシミヤ・薄地ラシヤ・絹布には御召・絲織・縮緬・錦紗・羽二重・大島等が用ひられ、又ビロードも用ひらる。裏地には羽二重・甲斐絹・八つ橋などが用ひられる。

㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同寸	身丈	着丈より二〇糎位短かく
袖口	着物と同寸		羽織より一〇糎長く
袖附	一糎増し		普通一米一〇糎内外
袖巾	四糎廣く	身八つ口	一〇糎
後巾	着物と同寸	小衿巾	二糎
前巾	いつぱい（但し脇縫は裾へ二糎廣げる）	繰越し	一糎以上
肩巾	着物と同寸	衿	着物より四糎増し
前下り	二糎	位置	竪衿下りより
竪衿巾	衽巾と同寸	ポケット口明	一四糎
竪衿下り	衽下りと同寸	ポケット深さ	一四糎

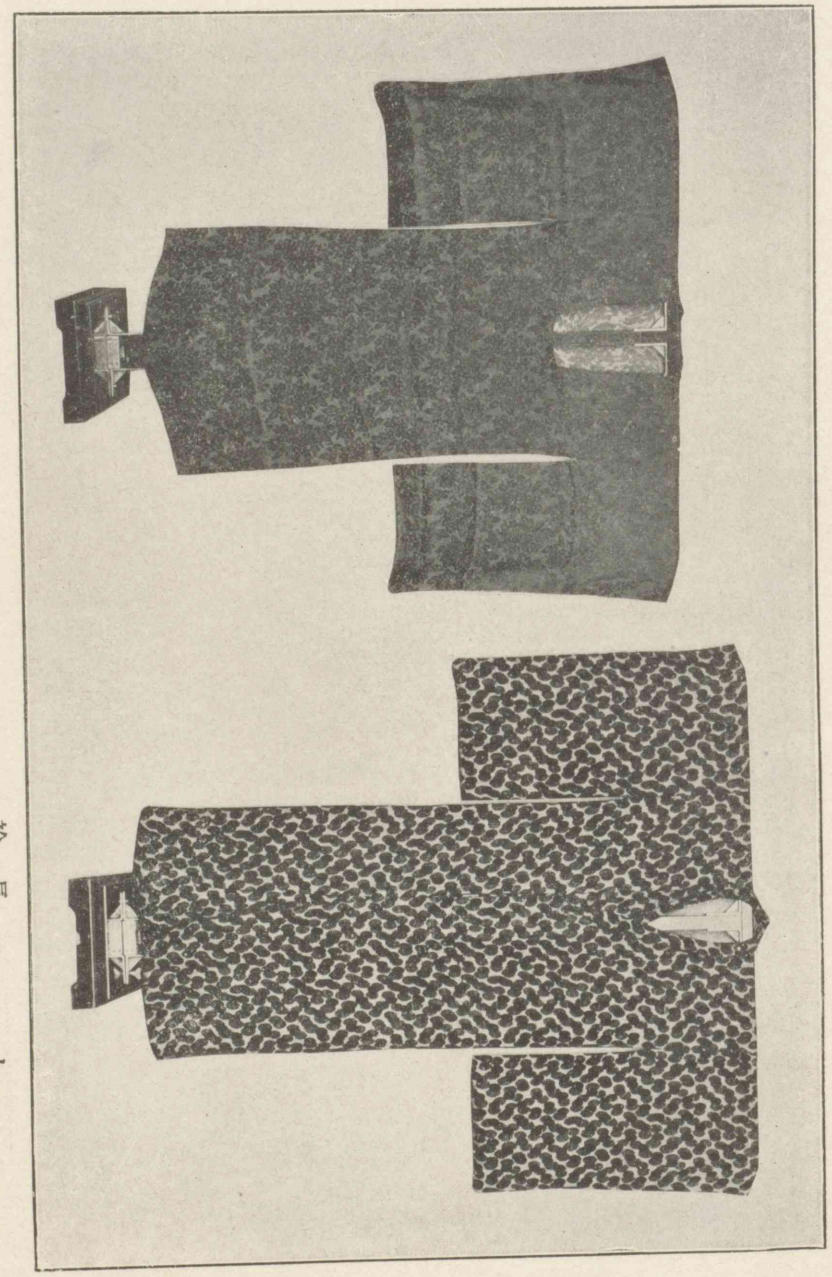
㊁　裁ち方と積り方

表の裁ち方は大體羽織に同じく、羽織の衿が竪衿に代つたと見てよい。しかし羽織と違つて襠が要らないから、前身頃から落した物は小衿・袖口・ポケット口切れ等とし、殘りは地薄の物は飾り紐にする。

布の折り方は袖・竪衿と折り、次に殘りを前後の差をつけて更に二つに折る。

胴裏の總用布はポケット布が要るから、羽織より三十糎内外長く要るのが普通である。ポケットは見えぬものであり、且つ丈夫な布がよいから胴裏と別のものでもよい。

注意　コートの胴接ぎの高さは前後揃ふのがよい。しかし仕立直しの場

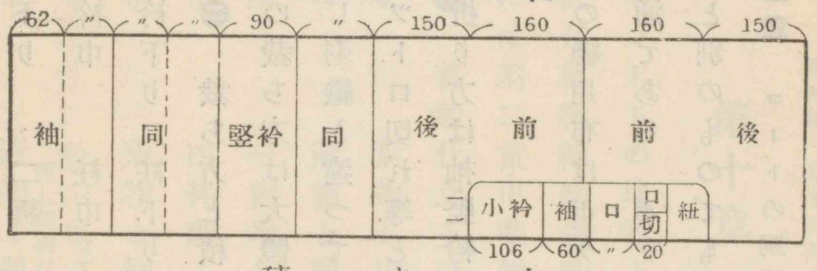


裕半コート

裕長コート

本裁女半コートの裁ち方

用布並巾　10米48糎



積り方

公式

袖丈×4＋**竪衿丈**×2＋**後身丈**×4＋**前後の差**×2＝**總用布**

{**總用布**－(**袖丈**×4＋**前後の差**×2＋**竪衿丈**×2)}÷4＝**後丈**

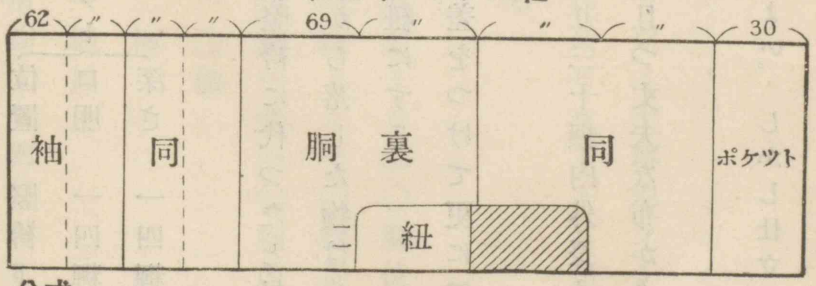
後身丈＋**前後の差**＝**前丈**

出來上り身丈－**竪衿下り**＋**前下り**＋**上下の縫ひ代**＋**繰越し**＋**三つ衿縫ひ代**＝**竪衿丈**

(**衿肩明**＋**竪衿下り**＋**竪衿巾**＋**縫ひ代**)÷2＝**小衿丈**

半コート裏の裁ち方

用布並巾　5米54糎

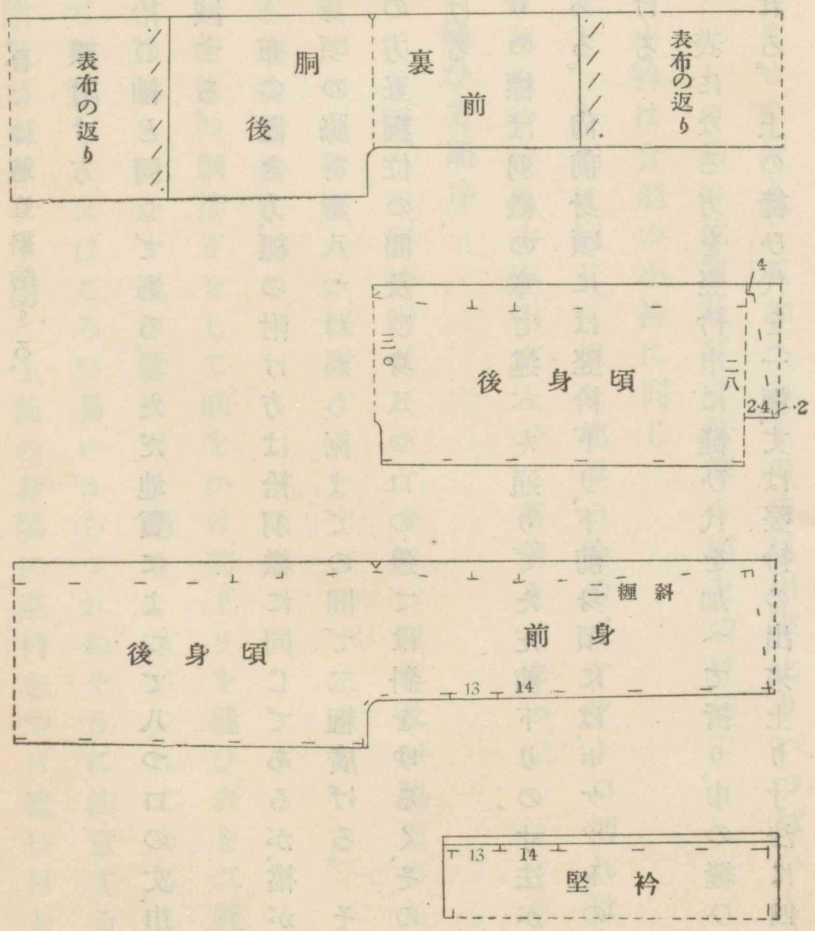


公式

袖丈×4＋**胴裏丈**×4＋**ポケット丈**＝**總用布**

出來上り身丈×2－**裁ち切り後丈**＋**接ぎ代**＝**胴裏丈**

標附け方圖



合には、適宜斟酌する。

㊂ 標附け方

一、**袖**　袷の袖と同じである。ただ地質によつて八つ口の丈、巾のつめ方を加減する。

二、**身頃**　布の置き方、標の附け方は袷羽織に同じであるが、襠がつかぬ代り、前身頃の脇を身八つ口から裾までの間で二糎廣げる。そのまげ方は裾の方五糎位の間及び身八つ口の邊では斜をゆるく、その中間で多くまげる。

前下りの標は羽織の章で述べた通りで、ただ前下りの寸法が違ふばかりである。尚前身頃には竪衿下り、下前身頃には、ポケットの位置の標をつける。

三、**竪衿**　表になる方を竪衿巾に縫ひ代を加へて折り、巾の縫ひ込みは裏に入れる。上の縫ひ代を一糎、丈は竪衿の出來上り寸法に四糎を見返し及びきせの分として加へたもの、巾は出來上りいつぱいとし、下前にはポケット口明の位置及び寸法等の標をつける。

四、**小衿**　小衿は合羽の小衿に同じ。

五、**ポケット**　合羽に同じ。但し地厚の物のポケット口切れは巾・丈とも一糎位差をつける方が出來上つて落着きがよい。

㊃ 縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、竪衿附及びポケット、四、背及び脇とぢ、五、袖附、六、竪衿絎、七、小衿附、八、紐附

一、**袖**　本裁女物袷に同じ。

二、**身頃**　前後の胴接ぎをして躾をかけ、前下りを縫ひ、表を二糎裏の方に返す。背脇を細かく縫ひ、縫ひ目を割る。糸がつれてゐると縫ひ目が縮んで見苦しく、又ほころび易いからつれぬやうに注意する。

三、**竪衿附及びポケット附**　上前の身頃に竪衿をつけ、縫ひ目を割る。下

前の身頃と竪衿とを合せ、ポケット口を明けて縫ひ、縫ひ目を割つて口明で前身頃とポケット布、竪衿とポケット布とを、それぞれ合せて縫ひ、口明に留をし、ポケットの底を縫つて縫ひ目をとぢつける

四、**背及び脇とぢ**　背及び脇とぢをして身八つ口を縫ひ、裏の方に折りをつけ、表から躾をかける。

五、**袖附**　袷のやうに表裏の袖をつけ、縫ひ目を割る。

六、**竪衿絎**　竪衿の下を縫つて、芯を入れ、竪衿巾を身頃の縫ひ代にとぢつけ、裏身頃をその上に細かく絎けつける。

七、**小衿附**　普通は角を額縁に作つてつけ、小衿附の縫ひ目を割り、落ち着きの工合が悪るければ、角に切り込みを入れて正しく整へ、裏竪衿上部及び裏身頃を絎けつける。

八、**紐附**　まづ仕上げをし、巾一糎五粍、丈三十糎位の紐を二本絎け、下前竪衿の中央の裏の方に、縫ひ目を下向きにして一本つけ、他の一本は上前裏脇縫の處につける。

飾り紐は、共色の打紐、又は表地の殘布を細く撚絎けにし各、好みによつて結び、合羽のやうにつける。

表地が地薄で、しかも上等のものは共布の撚絎紐をつけるのが上品である。

備考　一、並巾十米六十八糎で袷半コート表の裁ち方をせよ。但し袖丈は出來上り六十五糎とし、他は普通とす。

二、半コート後身頃及び前身頃の標附け方を問ふ。

三、半コートの裾を廣げる理由と、その標附け方について注意すべきことを述べよ。

第十一章　夜具類

第一　夜着

㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	六二糎	衿下	七五糎
袖巾	三二糎	衿巾	一二糎
袖附	袖丈と燧丈との和	衿肩明	一〇糎五粍
表身丈	一米五〇糎	燧	一五糎
後巾	三二糎	裾袵	三〇糎—四〇糎
前巾	二八糎	袵 衿袵	二〇糎
袵巾	一七糎	袖袵	一〇糎
袵下り	二二糎	綿の分量	二貫目内外
		眞綿	少し

㊁　裁ち方と積り方

表の裁ち方は、本裁長着と同様にし、尙表布で燧布をとる。又片面物は棒袵裁とし、用布の丈の短い物は鈎袵裁にする。燧布は都合で衿又は袵の端で取つてもよい。

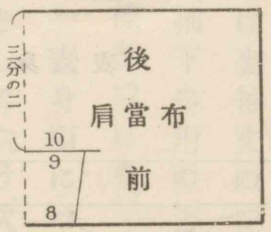
裏の裁ち方は表に準じ、袵の寸法に應じて、身丈・袵丈・衿丈等の寸法を增して裁ち、袖は袖袵の分として奥袖を取り、半巾にして用ふ。肩當布は、並巾一米四十糎位を要し、丈を二つに折り、巾を三等分して三分の一を前に三分二を後とし、衿肩明を九糎、前の方は八糎とし、一糎の斜をつけて裁ち落す。尙衿肩には一糎の切り込みを入れておく。

㊂　標附け方

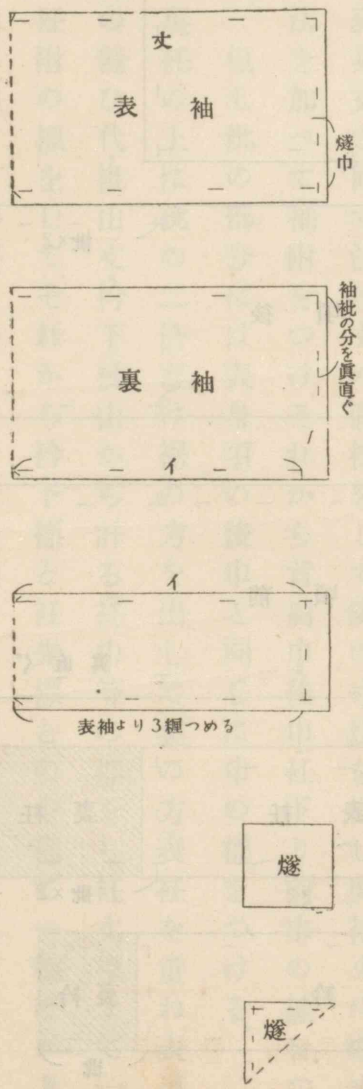
一、袖及び燧　燧布に寸法通り標をつける。

表袖には、丈・巾の標をつけ、袖下に附の方から燧の寸法を標つけ、裏袖には、巾を標して、丈は袵の表に出る部分の巾だけ表袖より四粍つめて標

肩當の裁ち方

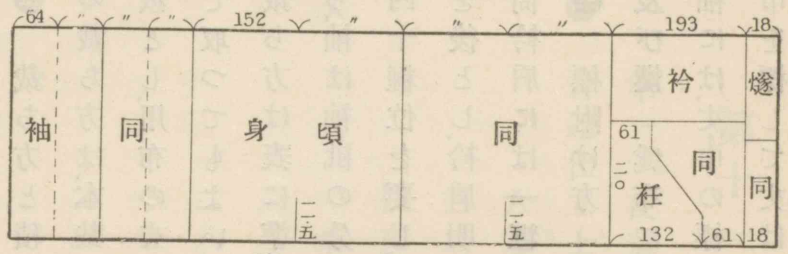


標附け方圖



夜着表の裁ち方

用布並巾　一反



積　り　方

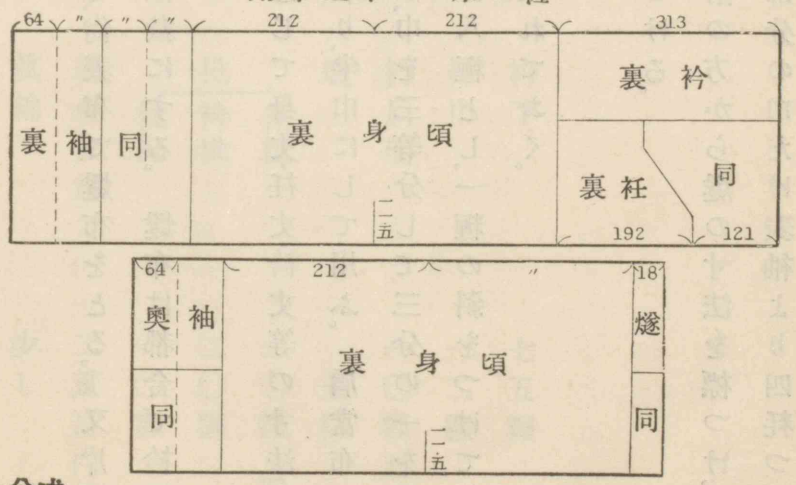
公式

袖丈×4＋**身丈**×4＋**燧**＋**衿丈**＝**總用布**

{**總用布**－(**袖丈**×4＋**衿丈**＋**燧**)}÷4＝**身丈**

夜着裏の裁ち方

用布並巾　15米63糎

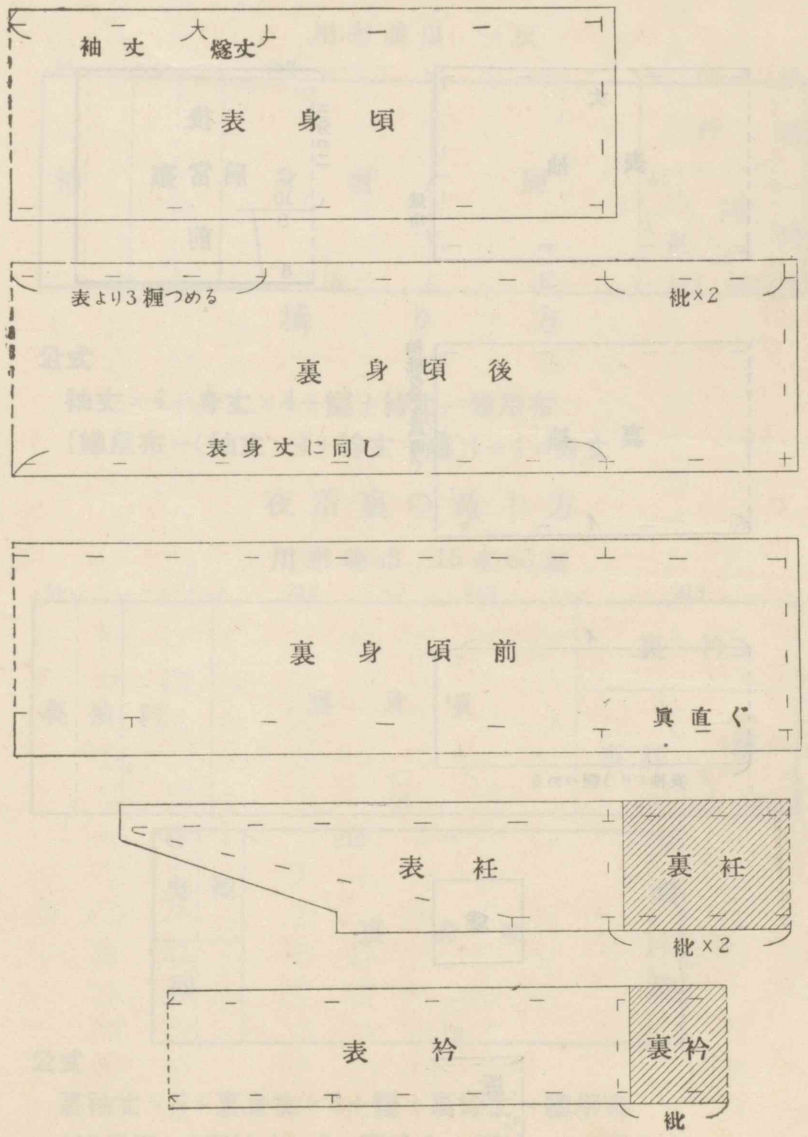


公式

裏袖丈×6＋**裏身丈**×4＋**燧**＋**裏衿丈**＝**總用布**

{**總用布**－(**裏袖丈**×6＋**裏衿丈**＋**燧**)}÷4＝**裏身丈**

圖方け附標



をし、奥の方は三糎丈をつめて、袍山から斜に標す。

奥袖は、裏袖丈のつめた寸法と同寸法に丈を標し、巾標をして表袖のやうに、袖下の附の方から燧の寸法を標し、裏袖の奥と奥袖の端とに、山及び合標をつける。

二、身頃　表身頃には、丈標をつけ、袖丈に燧丈の寸法を加へたものを、袖附の標としてつけ、次に背縫・肩巾・後巾・衽下り・前巾等の標をつける。裏身頃は、表身丈と同寸法に丈の假標をして袍の寸法を標し、奥袖丈に燧丈の寸法を加へて袖附をつけ、それから背・肩巾・後巾・衽下り・前巾の標をつける。但し袍の部分には表身頃の後巾と同じに巾の標をつける。

三、衽　裏衽の上に袍の二倍だけ裾の方を出して(裏の方)表衽を重ね、表裏の裾の縫ひ代・袍山丈・衿下(袍山から計る)衽巾等の標をし、衽丈標まで一糎に衽附の標をして、それから衿下標と衽先標との中程で一糎ばかり張り出し、程よく格好をつけて衿附の標をする。

四、**衿**　裏衿を二つに折り、衿丈をつけ、餘りを折り返して山を揃へ、表衿をその上にのせ、山・衿肩明・衽下り・衽の標をして巾標(仕立上り巾より一糎廣く)をしておく。

㊃　縫ひ方順序

一、袖、二、身頃、三、衿附、四、袖附、五、綿入、六、肩當及び掛衿

一、**袖**　表裏の袖口を縫ひ合せ、表袖の方へ折り、外袖の袖下に燧を縦の布目を合せて縫ひ附け、袖の方へ折る。奥袖も同樣にして燧をつけ、燧の角を留め、引續き表裏の袖下を縫ひ、内袖の方へ折りつける。縫ひ目には全部隱し躾をかける。

二、**身頃**　表裏の背(裏は背を衿肩明から十二糎縫ひ、その下を丈の三分の二ばかり縫ひ殘す)脇・衽を縫ひ、着物のやうに折り、表裏の裾合せをして表の方へ折り、衿下を縫つて表の方へ折る。

三、**衿附**　表裏の衿丈標を合せて縫ひ、表の方へ折り、左右とも衿の衽山を衿下の標に合せて衿をつけ、裏衿の巾は標より一糎控へて縫ひ合せる。衿先の處は、自然に格好をつけて斜に縫ひ裏の方へ折る。

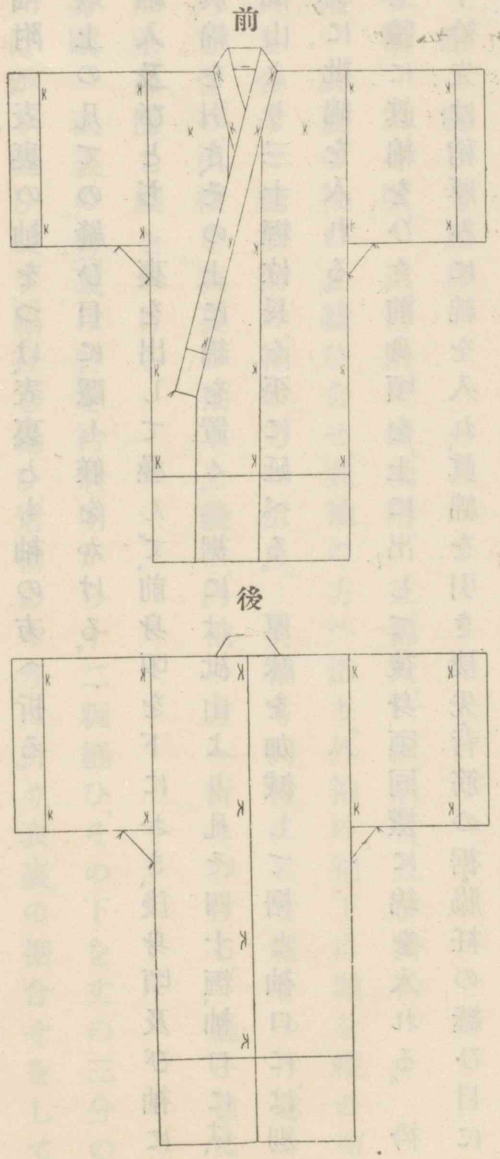
四、**袖附**　表裏の袖をつけ、表裏とも袖の方へ折る。以上の凡ての縫ひ目に隱し躾をかける。

五、**綿入及びとぢ**　裏を出して疊んで、前身頃を下におき、後身頃及び袖に眞綿を引き、その上に綿を置く。裾には衽山より凡そ四十糎、袖口には、衽山より三十糎位長く平に延べる。厚味を加減して裾と袖口には別に衽綿を入れる。

全體に眞綿をひき、前身頃を上に出して後身頃同樣に綿を入れる。衿下衿先は稍厚みに綿を入れ、眞綿を引き褄先・背筋の裾・脇衽の縫ひ目にそれぞれ引糸をつけて背の縫ひ殘した處から、引返して綿をよく含ませ、後に合標を合せて裏袖と奥袖との縫ひ殘しを紉けつけて、とぢ糸をつける。

六、肩當及び掛衿　肩當布の兩端を伏せ縫ひにして前後を折り、躾をかけて紮けつけて後に、掛衿の兩端を伏せ縫ひにして共衿をかけるやうにしてつける。

夜着のとぢ方の圖



第二蒲團

㊀ 種類・丈・綿の分量

蒲團の種類　丈と綿の分量

- 敷蒲團
  - 三布蒲團
    - 表　同じ布　丈　一米八〇糎
    - 裏　綿　一貫五〇〇匁
  - 四布蒲團
    - 表　四布　丈　一米九〇糎以上
    - 裏　五布　綿　一貫五〇〇匁
- 掛蒲團
  - 五布蒲團
    - 表　五布　丈　一米九〇糎以上
    - 裏　五布　同丈　綿　二貫匁

外に各々眞綿少し

㊁ 裁ち方と積り方

用布	積り方	裁ち方
三布蒲團一反	丈の六倍	全體を三等分す
四布蒲團　表七米二〇糎	表丈の四倍	表を四等分
裏一〇—一二米（普通は一反）	裏丈の五—六倍	裏を五—六等分す

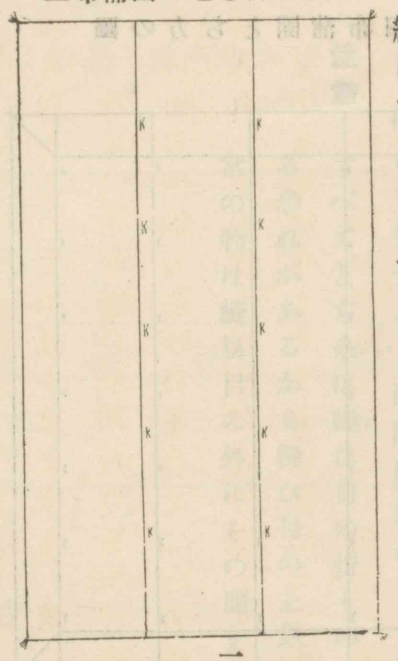
五布蒲團　表一反　丈の五倍　表裏共全體を五等分す
　　裏一反　丈の五倍

㊂ 縫ひ方順序

一、**三布蒲團**　三布蒲團は、表裏共同じ布で作るもので、表裏の布の續いたまま巾を縫ひ合せ、裏になる處の中央を、約一米二・三十糎程縫ひ殘して置き、綿を入れて引返す處にする。縫ひ目に折りをつけ、隱し躾をかける。敷蒲團は綿が厚いから、四隅の縫ひ目を合せて四糎位縫つて置くこともある。

綿入れ　裏を出して廣げ、縫ひ殘して置いた方を下にしておき、まづ眞綿を引き、綿は布より三十糎位出して縱横適當に入れ、綿の繼ぎ目に注意して重ね、隅の綿を切りとり、周圍の綿を布より少し長く折り返し、その上に又綿を一・二枚のせて眞綿をひき、四隅及び巾二個所、丈三個所に引糸を附け、新聞紙二枚を中央にのべ、四隅を中央へ折り曲げて、縫ひ殘した處から引返して紙を取り去り、丈及び巾をよく引き合せて、あとを紵けてとぢをする、とぢは三十糎おき位に三糎の針目でする。

三布蒲團のとぢ方の圖



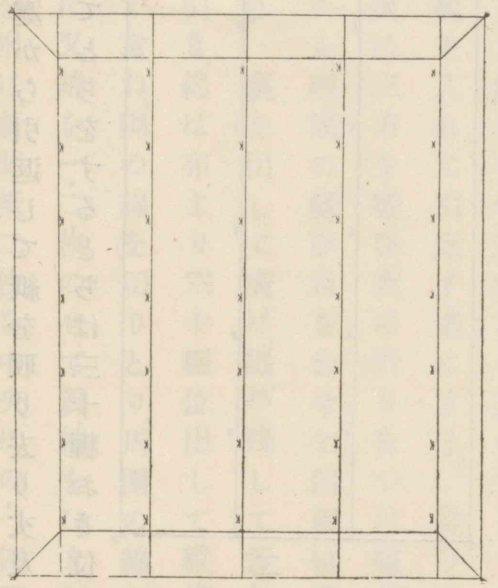
輪の方を上にして適宜に枕標をつける。

二、**四布蒲團**　四布蒲團は、鏡蒲團ともいふ。上下左右の袵の寸法を同じにするものであるから裏布は上下とも、袵の二倍づゝ長く要り、巾は袵の四倍だけ表布より廣く要る、その袵の寸法によつて裏を五布か、六布かにする。

表を全部接ぎ合せて折りをつけ、隱し躾をする。裏は中央を一米程縫ひ殘し、他は全部接ぎ合せて折りをつけ、隱し躾をかける。但し中央の接ぎ目の折りは表とつづくやうにする。

表裏の周圍を縫ひ合せ、裏布で額縁を作つて隠し躾をかけ、裏返して表布の方に綿を入れる。綿は角の處をよく整へ、綿を入れ終つたならば四隅に引糸をつけ、中央に紙を當てゝ四角を中央に折り曲げて、先に縫ひ殘しておいた所から引返して絎け、とぢをすること等三布蒲團に同じ。

圖の方ぢとぢ團蒲布四



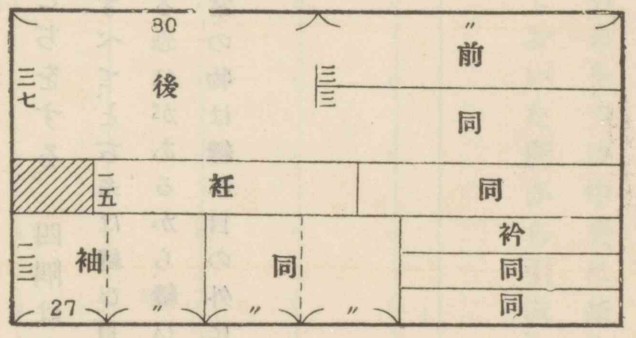
三、五布蒲團　表裏ともそれぞれ縫ひ合せ、次に周圍を縫ひ、綿を入れ、圖のやうにとぢをする。四隅は角のまゝ飾り糸をつける。

注意　すべて、とぢ糸は縫ひ目の折りの上にかかるやうにする。布の損ずる恐れがあるから、縫ひ目の上以外は、なるべくとぢないでおくが、平常の物は縫ひ目の外にその間をとぢてもよい。

第十二章　大巾・中巾物各種裁ち方

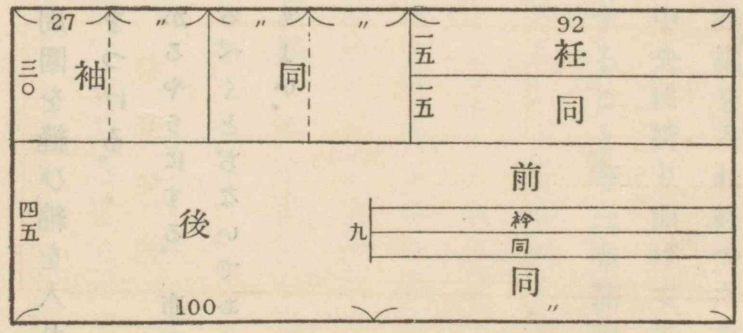
小裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ1米60糎



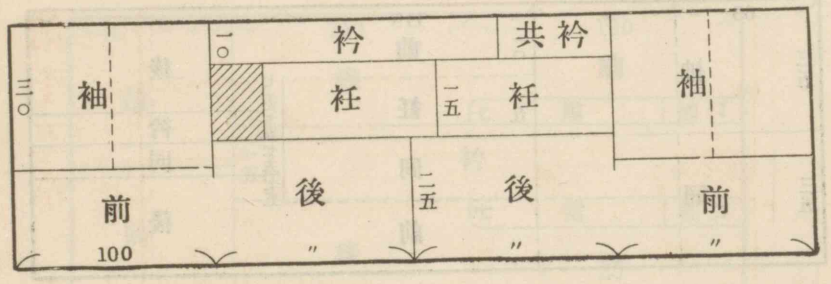
小裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ2米



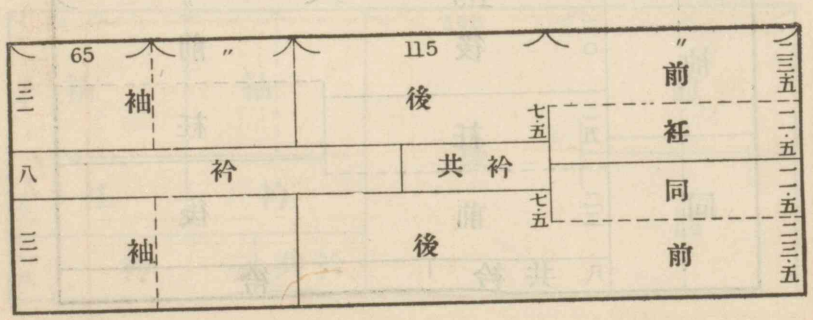
小裁長着の裁ち方

用布中巾(50糎)　長さ4米



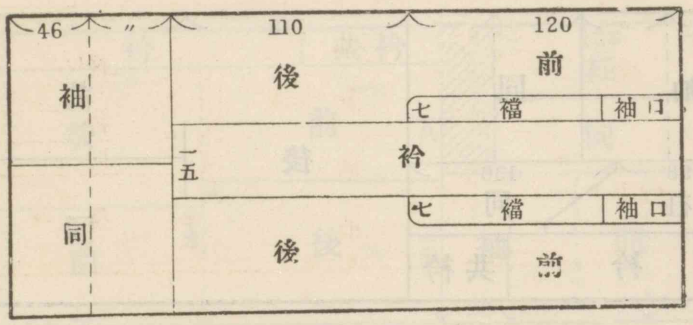
中裁長着の裁ち方

用布大巾(70糎)　長さ3米60糎



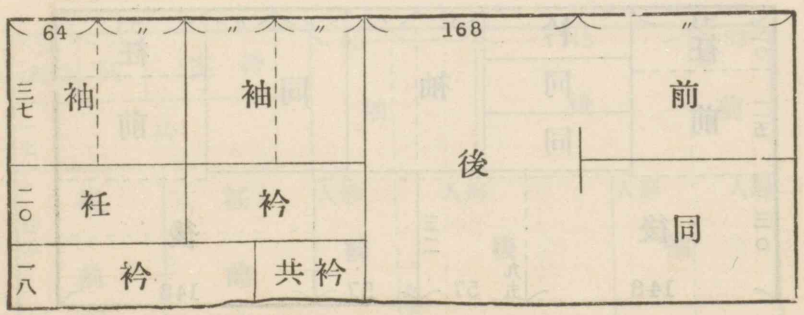
中裁羽織の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ3米22糎



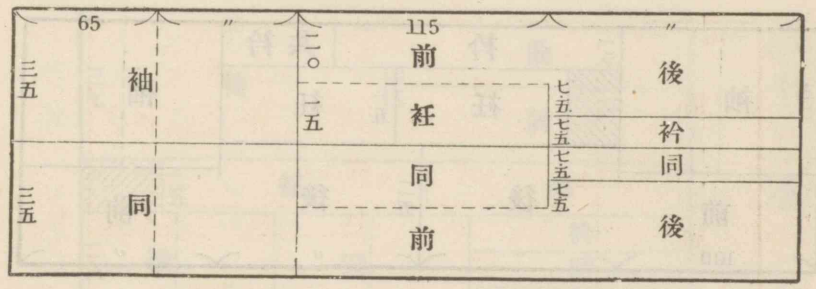
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ5米92糎



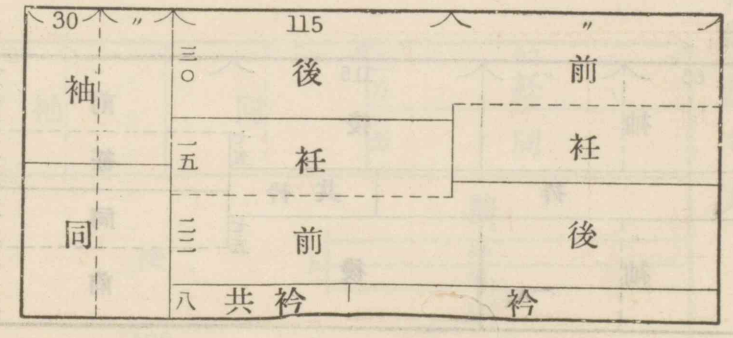
中裁長着の裁ち方

用布大巾(70糎)　長さ3米60糎



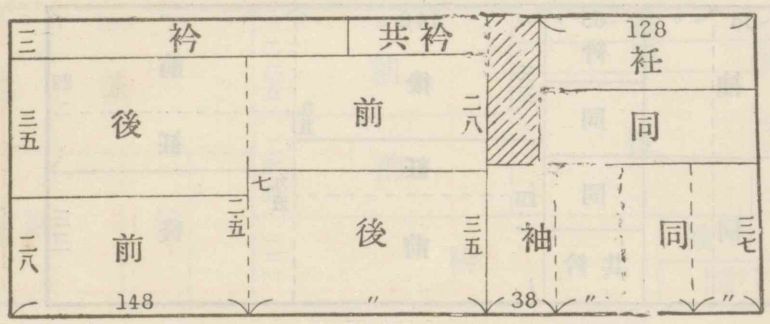
中裁長着の裁ち方

用布兩面物大巾(75糎)　長さ2米90糎



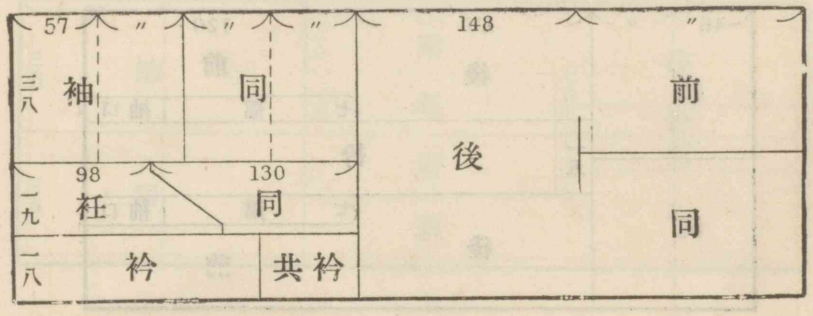
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ4米48糎



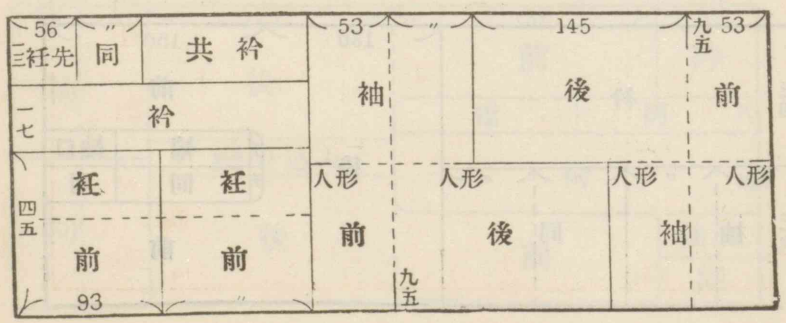
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ5米24糎



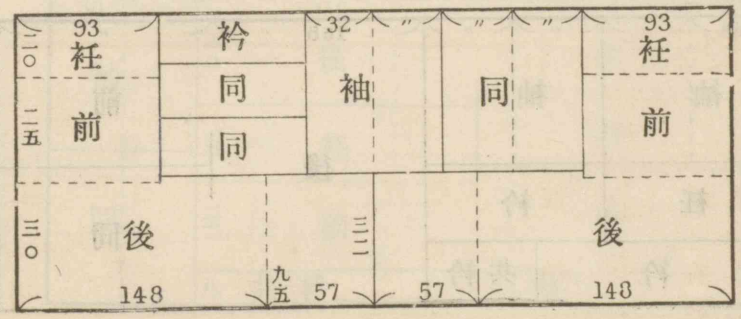
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ4米90糎



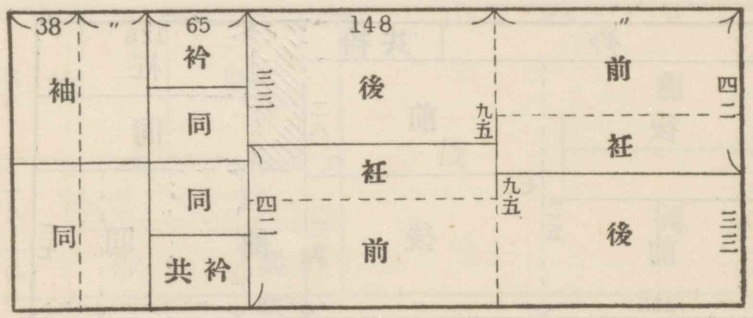
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ4米10糎



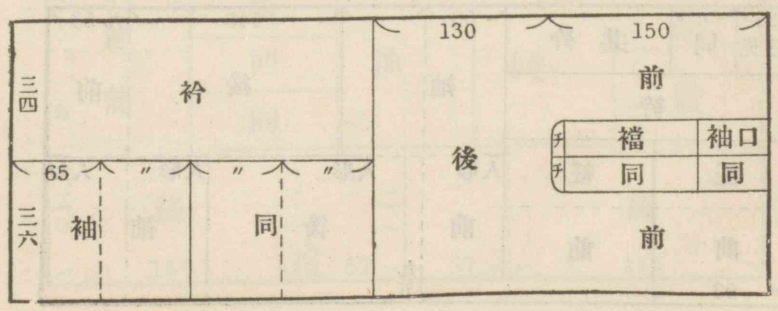
本裁長着の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ4米37糎



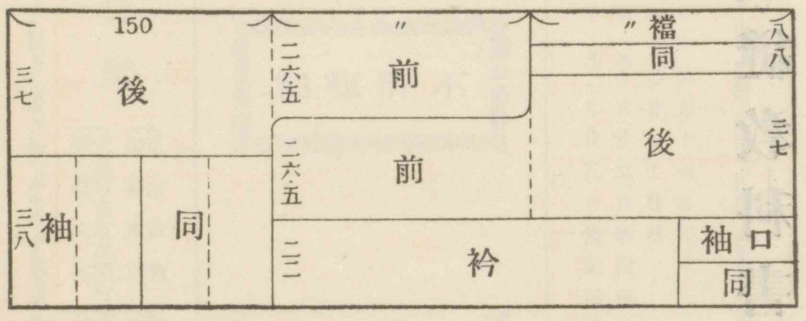
本裁羽織の裁ち方

用布大巾(70糎)　長さ5米40糎



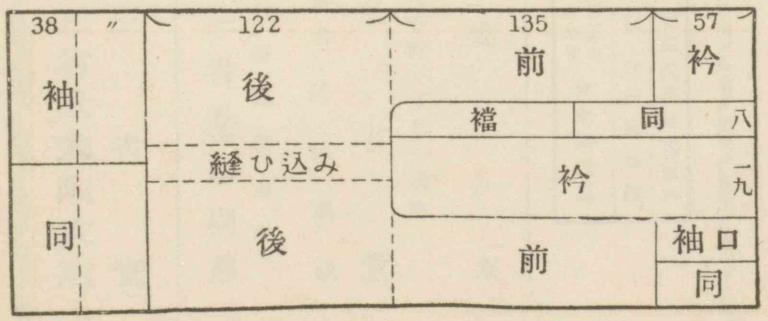
本裁羽織の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ4米50糎



本裁羽織の裁ち方

用布大巾(75糎)　長さ3米90糎



模範裁縫教科書　卷四　終り

大正十五年十二月十七日印刷
大正十五年十二月二十日發行
昭和二年九月廿二日修正再版印刷
昭和二年九月廿五日修正再版發行

模範裁縫教科書卷四
定價　金四拾參錢
昭和二年度臨時定價　金七拾三錢

不許複製

著作者　大妻コタ
東京市麹町區大手町一丁目一番地

發行兼印刷者　株式會社三省堂
代表者　神保周藏

印刷所　株式會社三省堂印刷部
東京府荏原郡蒲田町

發行所　（東京市麹町區大手町一五五五）株式會社三省堂
（振替東京三一五五）
（大阪市南區順慶町通一丁目四十一番地）株式會社三省堂大阪支店
（振替大阪一三〇〇）

本製藤伊

広島大学図書
2000081280